専修大学社会科学研究所月報
ISSN0286-312X
No. 574
2011. 4. 20

望月清司先生に聞く

質問者　村上俊介（本学経済学部教授）

2009 年 10 月～2010 年 1 月収録

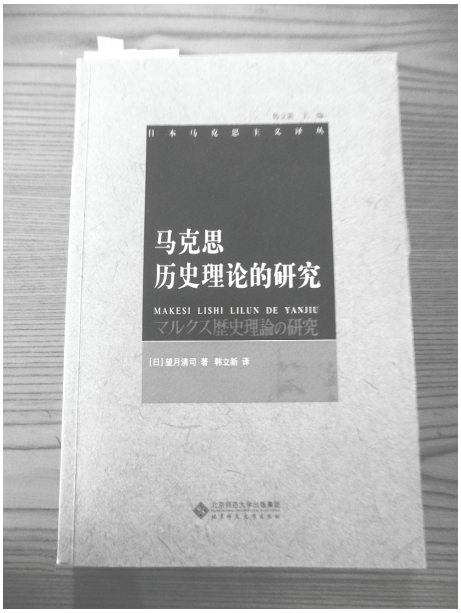
目　　次

はじめに …… 1
農奴制研究 …… 3
『資本制生産に先行する諸形態』研究 …… 12
『マルクス歴史理論の研究』へのプロセス …… 21
『マルクス歴史理論の研究』 …… 33
『ゴータ綱領批判』の翻訳と解説 …… 47
第三世界論・接合理論・原蓄論 …… 50
編集後記 …… 59

はじめに

長年希望していた望月清司先生へのインタビューが実現した。これまで何度もお願いしながら、実現できないでいたが、このたびようやくお引き受けいただけることになった。2009 年に先生の主著『マルクス歴史理論の研究』（1973 年、岩波書店）が中国語訳されたのを機に、訳者（清華大学教授　韓立新氏）との意見交換の中で、ご自身のご研究を振り返られたことが、お引き受けいただけるきっかけになったかもしれない。お話をうかがうにあたって、インタビューではご自身の研究史についてのみ語るが、個人史について語るつもりはない、とのことであったので、当方の質問もそれに限定した。

しかし許される限りで、ごく簡単に先生のプロフィールを紹介しておく。望月清司先生は



『マルクス歴史理論の研究』中国語訳
（訳者：韓立新）

1929年5月19日にお生まれになっているから、2009年に80歳になられ、現在もすこぶるお元気である。その後、旧制東京高校に進学され、3年次に病気療養のため 1 年休学、復帰されたちょうどそのとき戦後学制改革の時期に遭遇し、籍が宙に浮いてしまい、一時、大学への進学を諦められた。敗戦直後の時期である、恐らくご苦労をされたことだと推察する。とはいえ、学問研究へのいわば「渇望」のようなものは消しがたかったことが、先生のお話の中で伺えた。

おそらくはそのお気持ちによるのだろう、1951年に専修大学経済学部に2年次編入というかたちで入学され、入学したその年には早くもドイツ語の翻訳（「マルクス・ワグナー評注」、専修大学経済研究会『経済研究会会報』2・3合併号、1951年11月）、さらに3年次には論文「東ドイツにおける農業労働力の存在形態－グーツヘルシャフト研究ノート－」専修大学経済学研究会『経想』6・7合併号、1953年3月）を書かれている。当時の専修大学経済学部には、先生の恩師でもある小林良正氏、雪山慶正氏、秦玄龍氏、平瀬巳之吉氏、また内田義彦氏などがいた。上記のごとく当時、先生が群を抜く学生であったことは言うまでもなく、そのため、大学院に進学、助手を経て専修大学教員として研究・教育に身を捧げられた。さらに、1983年から1987年まで経済学部長を、1989年から専修大学学長を3期9年間務められた。1999年にご退職後、現在までお元気に、人文社会科学の多様な読書を楽しまれる一方、時には経済学から離れ、勅撰和歌21代集を耽読されながら日々をお送りになっている。ある時、西吉野の山奥、賀名生（あのう）にある南朝朝廷跡を訪ねたお話しをうかがった。先生のご説明によると、南朝のゆえにいわば番外の勅撰集になった「新葉和歌集」の歌人たちを追慕しての旅だったとのことである。その時の楽しげな先生のお話しぶりが印象的だった。

インタビューの企画はすでに10年前にあった。先生のご退職を機に、大学院時代に先生の教えを受け、その後大学教員となっている者たち（石塚良次氏、鈴木章俊氏、杉谷克芳氏、高橋誠氏、村上）と、2009年に経済学部を退職された内田弘氏の6人で、先生を囲んで通称「望月研究会」を開いた。1998, 1999年度のことだった。その過程で先生へのインタビューを企画し、各自が質問を持ち寄った。ところが2000年7月、奥様が他界され、研究会やインタビューとい

望月先生近影（2011 年 2 月）右隣は村上

う状況ではなくなってしまった。その後、数年を経て、先生のお宅にお邪魔するたびにインタビューをお願いし、ここにやっとお引き受け下さったという次第である。

収録は 2009 年 10 月から翌年 1 月にかけて、三回にわたり、合計 9 時間ほどになった。しかし、私の準備上の不手際で質問が重複したり、あるいはお話を伺う過程でプライベートな内容になった部分は削除した。先生のお話を伺い、改めて先生から学ぶことが多かった。大学院時代を思い返しながら、インタビューも、それを文字化して校正する過程も、私にとってはうれしい時間だった。貴重かつ楽しい機会を与えて下さった先生に改めて感謝するとともに、今後とも先生がお元気でお過ごしになることを心から願う。

村上俊介

農奴制研究

◇村上　このたびは、これまで何度もお願いしては断られ続けていましたが、インタビューをお引き受けいただいて、大変ありがとうございます。今日は、先生の今までのご著書あるいはご論文について、特に重要と思われるものを取り出して、先生からそれについてのご意見や思い出、その頃の動機、書かれた時の着想というようなことを伺いたいと思います。

お話を伺う順番として、先生のご研究を私の方で勝手に三局面に分けさせてもらいますと、第一局面は 1953 年から 67 年までの「中世ヨーロッパにおける農奴制研究」。先日は先生が学生

時代の 1953 年に書かれたガリ版刷りの「東ドイツにおける農業労働力の存在形態、グーツヘルシャフト研究ノート」を見せていただき、拝読しました。また、64 年からは、特にマルクスの『資本制生産様式に先行する諸形態』（以下『諸形態』）研究がかなりの本数出ております。その中で『諸形態』研究に内在されつつ、農奴制研究をやられていると思います。

第二局面が、これは 68 年から 80 年までででいいと思うのですが、ブレイクスルーとなった二つの御論文、1968 年社研の『月報』で書かれた、「『経哲草稿』における事物の疎外と自然の疎外について」、これが一つ。同じ年に『思想』に発表された「『ドイツ・イデオロギー』における分業の論理」。それをきっかけにして書かれたのが、おそらくこの、日本評論社の『講座マルクス主義８－資本主義』の中の「マルクス歴史理論における資本主義」。これをトルソーとして主著 1973 年の『マルクス歴史理論の研究』が書かれます。ここで初期マルクスの分業視点および『経済学批判要綱』、『資本論』分析にもとづき「望月歴史理論」と言いますか、あるいは「望月市民社会論」と言いますか、それが構築される。

さらに第三局面は 81 年から 83 年まで「第三世界論研究」の時期。この時期『経済評論』で、ここにありますが「第三世界」論に関する 3 論文を中心にして、ほかにも『思想』にも書かれました。この時期は第三世界論および本原的蓄積論の御研究ということになるだろうと思います。

ここから学部長や学長などの行政職を相次いで務められたことで、この前伺うと、韓国の読者たちのあいだで「望月沈黙」という言葉があったらしいのですが、ご研究の面で「沈黙」と言うより、ご性格からして与えられた職務に全力を傾注されたのだと思います。

ほかにも今の整理で収まりきらない、例えばブルジョア革命についての、あるいは近代に関する考察というのが、65 年と 68 年にあります。これについても別途伺いたい。

まず第一局面なのですが、先ほど申しましたように 1953 年に、「東ドイツにおける農業労働力の存在形態、グーツヘルシャフト研究ノート」を書かれまして、ここでドイツ東部のグーツヘルシャフトと西部のグルントヘルシャフトの比較というお仕事をスタートされました。57 年には修士論文を整理されて、「グーツヘルシャフト成立期と騎士団国家の市場構造」（『専修大学論集』13 号）を書かれていますが、この論文で東エルベにおける、再版農奴制成立直前の 14 世紀頃の農民自身の生産物余剰交換、これが行われるいわば局地的市場圏が論じられています。ここのところの実質的自由農が交換を行う場が、ある時期出現したと。この御論文は第二局面、第三局面を貫く最も重要なものと私は理解しております。まず、どうしてこのテーマで書かれようとしたのでしょうか。

◆望月　ここは序説が必要だろう。当時の学界の雰囲気というものがある。学部の学生がいきなりグーツヘルシャフト研究なんて目標を立てられるわけがない。敗戦後、それまで抑圧されていた言論が一気に解放されて、実に百花繚乱というありさまの中で、一つのホットな関心が農地改革で、そこであらためて戦前から有名だった山田盛太郎の「半農奴的零細農耕」を、世界史的に位置付けるとどうなるか、ということから「二つの道」論争というのがあったんだ。原点はレーニンで、要するに農業の資本主義化には「アメリカ型」と「プロシア型」があるという。前者はいわば素直な農業資本主義化、後者は封建的な領主の近代的衣更えとも言うべき「ドイツのユンカー（大地主）経営」だ。二分法だから日本の地主小作制は当然後者になるけど、ユンカーとせいぜい 10 町歩ぐらいの小粒地主とでは性格に大きな違いがある。じゃ、どう規定すればいいかが論争になる。

◇村上　そもそもケタが違います。

◆望月　そう。そこで、ドイツ特にエルベ河の東に特徴的にひろがった領主的経営、つまりグーツヘルシャフトとはそも何か、という関心が高まったんだ。「半農奴的」というところがぴたり平仄が合う。戦前にも林健太郎の研究があったけど、当時の私に近かったのは、高橋幸八郎さんの編著『近代資本主義の成立』（1953 年）に収録されてた二つの論文だった。けど、当時の専修大学にはない文献ばかりだ。僕は入学して１年後から図書館のアルバイトをしてたから、書庫は自在に利用できたけど、仕方がないから、『国家学辞典』という超大項目主義の辞典に含まれていたテオドル・クナップの「農民解放」という項目を辞書を引き引き読むことから始めた。コピー機なんてないから、もっぱら昼休みにせっせとノートを作った。冬は手がこごえたね。暖房は貸出し室の石炭ストーブだけで、閲覧室にはないんだよ。

◇村上　今では想像もつきませんが、いいお話です。

◆望月　３年ぐらい前、法政大学の総長をやった清成さんの短い文章で、高橋幸八郎ゼミでグーツヘルシャフト研究を分担した、という話を読んで意外に思ったことがある。経営学の先生だと思ってたから。あのころの一種流行のテーマだったんですよ。要するにグーツヘルシャフトというのは、日本の地主制を理解するためのいわば反射軸というか、それに照らして日本の地主制の特殊性を研究する、そういう鏡だったのだね。だから最初の研究はもっぱら「どう搾取されていたか」ということで、エルプウンターテーニッヒカイト（Erbuntertänigkeit）という、世襲隷民制と訳すんだが、名前からして何かもう、ぎりぎりに絞られちゃって子々孫々に至る

までというそういう感じがするので、よけい我々の関心をそそるわけです。

◇村上　たしかに子々孫々に至るまで絞り上げるぞ、という脅迫的な名称ですね。

◆望月　歴史的に東西ドイツを分ける境になってたエルベ川、かつてはスラブ系農民の地だったところへドイツ人が軍事的に植民してゆく。西ドイツの進んだ農法を持ち込んでせっせと生産したから、その後の一時、東エルベは西欧にとっての一種の穀物供給地になったんだ。だけど細かく見ると、剰余の全部が地代として徴集された上で領主が商人に売ったものではない。農民もけっこう独自に商人相手に売っている。あそこに流れるヴィスラ川なんていうのはエルベ川同様に幅が広くてゆったり流れる。要するに奥の奥まで、バルト海を航行する外洋船が入ってこられるんだ。

記録読んでいると領主ばかりでなくて、農民もせっせと村で固まって、集めてそれを商人に売ってた。あるいは逆に商人が村の中まで入ってきて、穀物を買い集めたという、そういう記録が目についたので。だから修士論文に至るまでの間に、領主がいかに搾取していたかという観点がだんだん薄れてきて、農民がいかに自主的に商品経済に参加し始めたかというとことに関心が移って行った。

◇村上　その時にはもう既に大塚さんの局地的市場圏が頭の中にもあったのでしょうか？

◆望月　大塚さんの局地的市場圏理論ていうのはかなり古いからね。それから私の中世農奴制に関するイメージの中の自由の領域というのがだんだん膨らんできたんですね。とかく日本では、「百姓は絞れば絞るほど出てくる」とか、「生かさぬように、殺さぬように」というけど、実態は必ずしもそうではないと網野さんなんか言ってるよね。けれど、それまではまさに日本の小作人と言えば、明治中期に長塚節が書いた「土」という小説のイメージだった。茨城県と千葉県の間の農民の話で、夏目漱石がこれを読んで、「日本に生まれたことを恥と思う」と言ったくらい。そういうイメージ、小作料を納められなきゃ娘を売れ、というような地主制のイメージが牢固として頭に入っていたから、余計、ヨーロッパの農民の持っている、市場への参加自由というのが印象的だったんだ。それで大分東ドイツのそれこそライプアイゲンシャフト（Leibeigenschaft）へのイメージも変わってきたんだ。

◇村上　そういうところでその後に書かれる 1959 年「いわゆる再版農奴制の南西ドイツの特質」(『土地制度史学』1 巻 4 号)、あるいは 1960 年の「ドイツ農奴制の古典型と純粋型、ライ

プアイゲンシャフトの系譜を中心として」(『日本資本主義の諸問題』、未来社）の２論文があるのですけれども、そこで最初の御論文のほうで、東エルベより先に南西ドイツのほうで「再版農奴制」というのができていて、そこではそうは言っても、その「再版農奴制」というのは東の場合と意味が違っていて、実質的自由農だったと。

◆望月　名前だけね。これは、実はエンゲルスの「再版農奴制」への勘違いと、そのエンゲルスさえまじめに読んでない、当時の、どういうか歴研派＝大塚史学への批判だったんで、土地制度史学会での発表時には「質問なし」だったように記憶する。あたりまえだ。エンゲルスの権威を傷つけたんだから。この発表原稿を学会の『土地制度史学』には載せてはくれたけれど、学会誌の次の号では、嫌がらせというか、ソ連のスカスキンの、まるで古典的な「再版農奴制論」を翻訳して載せるという扱いだった。

◇村上　再版された「農奴」といっても、名前だけだという論旨でしたよね。

◆望月　ちょっと整理すると、領邦君主制へ権力が集中する前は、土地（グルント）の領主（グルントヘル)、裁判権の領主（ゲリヒツヘル)、人身（ライプ）支配権を持つ領主（ライプヘル）が別々で、農民はこの三者にそれぞれ違う貢納を収めていたんだ。おまけに三つのヘルの支配空間は必ずしも重なっていない。それが領邦君主という新しい種類の権力にまとめられる過程で、三権が空間的にもはじめて重ねられるんだ。

◇村上　領民がみんなウンターターンにされるんですね。ドイツの場合、15、6 世紀の「領邦化運動」によって編成されていく。

◆望月　そうだ。職業も身分もみんななならして「ウンターターンつまり臣民」にしてしまう。それをもう一歩進めて「領民ひとしくライプアイゲネだ」と呼ぶようになった。農民だけでなく、都市の市民も騎士も聖職者もひっくるめてだ。

◇村上　ライプアイゲンシャフトという言葉自体は、先生が言われていたように人身領主権の下にあるかないかという、制度的なレベルの身分、形式上の問題だということであれば、「農奴制」概念の当時の通説である古典荘園－賦役地代－人格的不自由の「農奴」で、もう一つ、次の段階の純粋荘園－現物貨幣地代－土地保有の「隷農」という図式から来た概念だと。ここ、大学院の講義で記憶にあります。それは土台から解体すべき、となる。

◆望月　あの二分法は、高橋さんが『資本論』を使いながら定式化したもので、マルクス主義史学と高橋史学に共通の理解になった。ちなみに、新 MEGA の研究では「資本制地代のゲネシス（発生史）」という題はエンゲルスがつけたんだってね。僕は最初からマルクス同時代の３タイプと見てたから、この新発見はうれしいね。

◇村上　「農奴制」といったらすぐ「賦役」に結びつけないで、実質的自由農もおり、奴隷的下層農がおり、自由農もおり、そのほかにもいろいろな身分がある。そうした史実からちゃんと歴史を組み立てるべきだと…

◆望月　南ドイツのかなり高位の聖職者さえ「ライプアイゲネ」だったんだから。

◇村上　そういうことですね、さっき述べたような図式は通用しない、ということを書かれたわけは。この間、ジュセフ・ギースとフランシス・ギースの『中世ヨーロッパの農村の生活』（青島淑子訳、講談社学術文庫、2008 年）なんか読んでいて、まさにその通りのことが書かれていて、先生の初期のご論文を思い浮かべました。当時のドイツの研究水準では、その辺りのことはどうだったのですか。先生が読まれていて、そういうようなことがどんどん出てきていたわけですか、研究論文から。

◆望月　別に新しい研究成果なんかじゃないよ。日本の唯物史観史学＝高橋史学の概念装置で、ドイツの法制史などを読むと、全然話が合わない。前に出てきた「隷農」という用語に高橋さんは「ヘーリゲ（Hörige）」っていう言語を当てているんだけど、ドイツの歴史家は「ヘーリゲという身分は存在しない」と書いているから悩んじゃうわけだ。この頃読んだドイツ中世経済史の標準テキストだったリュトゲを読んだって、おんなじだ。要するに日本でのヨーロッパ経済史の基本概念は、日本でそれなりに進んでいた『資本論』理解を大前提にして作られた、まったくこの島国にしか通用しない概念なのじゃないか、という、なんだか見てはいけないものを見てしまったような、研究を始めたばかりの青二才には恐ろしいような経験だったね。

◇村上　唯物史観史学というのは、先生のいわれる「教義体系」の史学ですよね。それを高橋史学とイコールで結んでいらっしゃいますが、それは大塚史学じゃないんですか。

◆望月　広い意味での大塚史学というのは、大塚さんのイギリス経済史、高橋さんのフランス経済史、それに松田智雄さんのドイツ経済史という、一種の分業体制だったんだが、このうち

一番マルクスと密着していたのは高橋さんでした。例のドッブ＝スウィージー論争の国際版というか、「封建制から資本主義への移行」論争に、日本の論者をいわば代表して参加したのが高橋さんだった。という構図が、前に述べたイコール記号の背景にあります。高橋さんは、大塚さんより『資本論』を読んでる。マルクスの様々な片言隻句を集めてきて、きれいに整理するのが非常にうまい人だった。実は中学・高校を通じての親友が高橋ゼミで、彼からガリ版刷りの講義プリントをもらった。僕の言う「高橋史学の体系美」のエッセンスだ。やはり若いとそういうスッキリした体系に惹かれるわけですよ。だから、大塚さんの『近代資本主義の系譜』から経済史に入門したけど、まもなく高橋さんに惹かれたのは、そこです。ところがだんだん、その美的体系が事実とかなり違うようだということが分かってきて、高橋史学から離れた。

◇村上　そういう既存の農奴制概念、あるいは隷農制概念の整理を壊して、そこから実質的自由農を抽出されようとしたのは、なぜだったんですか。もうその時には、局地的市場圏の中における農民、自営農と言いますか、それを中世の、大陸のほうで見つけ出そうということだったんですか。

◆望月　「自営農」というのは誤解を生むよ。独立はしてないんだ。領主制の下にいるが、地代を納めたあとの余剰の自由処分権を持ってた。それにしてもやはりそれは西における農村的市場経済というものに対する知識が私には欠けていたからね。東のほうはかなり調べて、計算したりなんかしたのだけれども、西については知識が欠けているから、ここはもう一つ、西を一生懸命勉強しないと、やたらに「東と西は違う」とか「いや、同じだ」とか言っても、西のこと、実態を知らないのでは、研究として体をなしていないというのがあって、それがゲッチンゲンを留学先に選んだ一つの理由だった。近世の農産物価格史をやってたヴィルヘルム・アーベル教授の研究所だ。初めは『ドイツ農民戦争史』で有名なギュンター・フランツのいたシュツットガルトへ行きたかったのだけれども、いつか話したように、「南部のドイツ語に慣れるとあとで困るよ」なんていう雑音が耳に入って中部ドイツへ。何か今考えると本末転倒だったが、アーベル教授は親切だった。当時の東ドイツの研究者とも、イデオロギー抜きで交流してた。

◇村上　留学に行かれる前なのですが、実は 64 年から精力的に、66 年までの 3 年間、一連の『資本制生産に先行する諸形態』研究をおやりになっていますけど。

◆望月　『諸形態』研究と「疎外」論研究と、どっちが先だった？

◇村上　『諸形態』研究です。1964 年から。その前に 1962 年「ワイステューマーにおける教会民について」(『専修大学論集』29 号）があるのですが。

◆望月　そうだ。「ワイステューマー」が、西の研究のとっかかりだった。

◇村上　この御論文の内容は、確かワイステューマーの「教会民」というのは比較的自由だったというけれど、そんなに世俗領主下の領民との差はない、同じようなものだと。

◆望月　「教会民」（ゴッテスハウスロイテ）というのは、修道院領・教会領の農奴なんだが、修道院、教会ごとにきびしい、やさしいという差はあった。

◇村上　だから、とりわけて「教会民」が比較的自由であったというわけにはいかないということですね。

◆望月　ええ、考えてみればごく普通のこと。「教会民」という名前で一括されてしまうと、何だか別の仕事をしているようだけど、ただの農奴だ。結論はいかにも平凡だが、それで中高ドイツ語で書かれている「ワイステューマー」と取り組んだのは収穫だった。

◇村上　それにしても、中高ドイツ語などとどうして格闘される気になられたのですか。

◆望月　いや、実はある本に刺激されてね。その本は今も取ってある。これこれ、このドイツ経済史の研究者には、学びはじめの頃はずいぶんと教わった。けれど、この本にまとめられた内容、というより研究の仕方にふと疑問がわいたんだ。

◇村上　その疑問というのは‥‥‥。

◆望月　あの論文を書かねばと決心した衝動というか、義務感といってもいいが、そこが普通とちょっと違う。問題は「ワイステューマー」だったよね。これは「判告集」とも訳されるもので、要するに、村落単位の領主裁判での「判決と判決理由の書」を集めたものだ。で、「判告集」とも言う。そこで、前に言った「ある本」の著者だが、ここでは名誉のために名は伏せるが、彼はオーストリアのワイステューマーを使っている。それで勉強しているときに、まるで天の配剤というか、専大の図書館に、グリム兄弟が精力的に収集した『ワイステューマー6 巻』

が入ってきたんだ。僕が注文したんじゃないよ。こちらはもっぱら南西ドイツとスイスの所領の判告集だ。農奴制研究のためにも、オーストリアよりこっちの方がいい。これだというんでとりつき始めた。

ところが、前に言った本ね。著者は、例証のために判告文をいろいろと上げていて、彼の翻訳、というより一見忠実な翻訳のように見える文章のあとに、中高ドイツ語の原文を長々と掲げている。さすがは大したもんだ、やっぱり中高ドイツ語をやらねばいかんと感心したんだが、こちらも南西ドイツの判告文を、苦心惨憺いくつも翻訳しているうちに、彼がいかにも原文の翻訳らしく書いている文章は、そのあとの原文とは必ずしも一致していない。正確な翻訳とその原文じゃない。そう見当がついてきた。

◇村上　それで、こう対語表みたいのを作っておられたんですね。なんか細かくこう、ここは間違ってるという。

◆望月　そうそう。もうね、これ読んで、自分でちゃんと中高ドイツ語、正しくは「中世高地ドイツ語」（ミッテルホッホ・ドイッチュ）を勉強しなくちゃと思ったんです。ちなみに「高地」というのはドイツの南部とスイスの一部ですね。いつか、昭和十年刊行の文法書を見せたでしょう。戦前の帝大独文科の教科書だろうと思うけど、表紙もすり切れてるし、古本屋はたぶん中級か高級かのドイツ語かと思って店の前の百円均一の中に入れてたんだね。で、それまでほとんど手探りで、同じ形式の法文を並べて見当をつけていたから、私もう小躍りしてこれ買ってきてさ。一生懸命ミッテルホッホの読み方の勉強をした。それでますます、あの人は原文を読めていない、ということを確信するに至った。これがあの論文の隠されたねらいだね。けど、文法書では人称変化とか時制はわかるけど、個々の単語はわからない。当時のノートを見ると、そこらの苦しみがわかる。

◇村上　確かにこれは目が痛くなるような細かい字ですね。ああそれでこの論文の中でも、大事そうなところはミッテルホッホの原文を慎重に併記されているんですか。

◆望月　これは全部自分で読んだという証拠の一部だ。読みはじめたころは、文法書はもちろん辞書がない。分からない言葉は書きためておいて、神田の「崇文荘」という、以前は中華料理屋「新世界」の隣にあった洋書の古書店に調べに行くのさ。その棚の一角に、中高ドイツ語辞典がある。現代ドイツ語への訳だ。そんな希少な本は当時の専大図書館にはなかったんで、しょうがない。そこであれこれ本を買うような顔をして、ほかの本を見たついでにという顔で、

頭に記憶してきた単語を引くんだよ。分かった訳語も、もちろんメモなんかできないから、いちいち憶えてまた研究室に戻り、忘れないうちに急いで再生するんだ。貧乏大学の貧乏学者の涙ぐましい勉強の一こまだね。

◇村上　その辞書を買わないで？

◆望月　高いんだ、それが。当時の給料では手が出ない。じゃ図書館で、というのは今の話で、僕は大学院を出るまでずっと図書館でアルバイトしていたから知ってるけど、紀伊国屋への借金が溜まっていて新本を買えないんだな。書店員が経理課に催促にきたついでに事務室に挨拶に来ると、事務の人がぺこぺこと頭を下げてた。記憶では、教員に研究費なんてなかったような気がする。でもそんな苦労をしてでも、ほんの一部だがワイステューマーの原文を俺はちゃんと読んだぞ！と、天に向かってどなりたかった。

『資本制生産に先行する諸形態』研究

◇村上　そう言ってはなんですけど、今となってはいい思い出だと思いますが、当時はご苦労をされて、そこから『資本制生産に先行する諸形態』研究に入られます。年表を見ますと、先生のその『諸形態』研究というのは 1964 年の 2 月から 66 年 5 月まで 6 本続くんです。列挙しますと 1964 年 2 月「『諸形態』と『農業共同体』に関する覚え書き」(『専修大学社会科学研究所月報』No.5)、1964 年 3 月「『諸形態』と『農業共同体』に関する覚え書き (2・完)」(同 No.6)、1965 年 4 月「『諸形態』における『奴隷制および農奴制』について」(同 No.19)、1965 年 12 月「『諸形態」と『インド通信』におけるアジア社会像」(同 No.27)、1966 年 3 月「マルクス『諸形態』の研究」(専修大学社会科学研究所『社会科学年報』第 1 号)、なおこれは上記 4 論文をまとめたものです。そして 1966 年 5 月「『諸形態』と『資本論』における原蓄期自営農民について」(『専修大学社会科学研究所月報』No.32)。以上です。そこでまず、なぜ『諸形態』研究に入られたのか伺います。

◆望月　ミッテルホッホで論文一本じゃ効率は悪いが、ちょっとくたびれた、という心境でもある。それに『諸形態』史そのものの外的な影響があるんだね、ちょっと待ってくれ。ああ、これだ。『諸形態』研究のサイクル表。いつか大学院のゼミで配ったやつ。

◇村上　ああ、はい、思い出しました。

◆**望月**　『諸形態』研究には政治がらみで空白期と高揚期があって、ほぼ5年ごとにやってくるということを整理したものだ。この表で改めて振り返ると、日本に初めて『フォルメン』(『諸形態』) がロシア語から翻訳されたのが49年で、大塚さんの『共同体の基礎理論』が55年。59年に国民文庫で『諸形態』の翻訳が出る。これは東独で出た小冊子形式のやつの翻訳だ。『諸形態』部分を含む『経済学批判要綱』第3分冊が出たのはやっと61年だ。『要綱」の第1分冊は58年なんだが、当時はまだ中期マルクス研究なんて雰囲気はなかったんで、この第1分冊は読んでもさっぱりだった。という時系列のなかで、なにしろ大塚さんの反応が早かったんで、以後数年間は、いや実は今でもこの大塚共同体論が『諸形態』の共同体の三段階論の正統の解釈という形で伝わっちゃった。

◇**村上**　そうでしたね。で、ある時点から急に『諸形態』研究が続いてでるのですが、その切り替えのきっかけは何だったんですか。

◆**望月**　55年の大塚さんの『共同体の基礎理論』論が問題なんだ。それまではソ連からもたらされた『フォルメン』の訳を基に議論してたんだが、何しろロシア語だからマルクスの原語がわからない。それを必ずしもマルクス研究者でないロシア語屋さんが訳したから、靴を隔てて痒きを掻くという具合だ。そのうち、『要綱』(いわゆるグルントリッセ) のドイツ語完本が入ってきたのが53年。ようやくドイツ語で『フォルメン』が読めるようになった。54年に佐藤進さんが目立たない選集で訳している。その翌年に大塚さんの本が出た。序文には、「『諸形態』をふまえてはいるが、独自の構成である」と書かれてるんだが、何しろ「アジア的形態・ローマ的形態・ゲルマン的形態」という構成がそっくりで、各所にマルクスの言葉を引用してるから、大半の人は、これが『諸形態』の親切な解説本と思いこんでしまった。

◇**村上**　読んだ時点はずっと後ですけど、私もそう思って読みましたよ。

◆**望月**　無理もない。だが、この問題はまた後で話そう。

◇**村上**　ちょっと整理しますと、6 本の御論文では4点ほどのことが書かれているのではないかと思います。一つは、「唯物史観」のこの「生産様式継起的発展説」というやつを『諸形態』を根拠に否定される。これが第1。第2がアジア的、古典古代的、ゲルマン的共同体という三類型のうち、どれが直接生産者の社会的分業を育む培養基でありえたのかというのを探る。第3点目が、「奴隷制および農奴制」という、これまでのご研究を踏まえて、マルクスの視点を『諸

形態』の中に確認される。で、第４点目は、その「本原的蓄積」、つまり直接生産者と生産手段の分離の対象であるこの直接生産者による小土地所有、つまり実質的自由農ですが、後の言葉でいうと、「労働と所有の同一性を体現したアルバイター」ということになると思いますが、この歴史的起源を探ったものとして、『諸形態』を読む。

◆望月　ふむ、うまく整理してくれたね。

◇村上　この第４点目は「諸形態と資本論における「原蓄期自営農民」について」の最後のところでそういうことを書かれていたと思います。66 年５月の社研『月報』に載ったものです。「原蓄」の対象としての実質的自由農を『諸形態』の中に読む、別の言葉で言えば、「労働と所有の同一性を体現した農民」というのを『諸形態』の中に読まれるということですので、実質上もう『要綱』の中の文脈に位置付けられてきているとは言えないですか。

◆望月　いや、文脈とまでは言えない。というのは、平田さんが着目して、「これがカギだ」と強調した「領有法則の転回」。これが実は『要綱』の最後の言葉だというのを私は気が付かなかった。これは、手島さんの訳には載っていなかったから。その底本の東独版でそもそもカットされてたから手島さんの責任じゃない。『要綱』そのもの。それまでは歴史的な事実だけに注目していたから、『要綱』第３分冊が出てからも、例の、ようやくここで「領有法則の転回」が終わってさあ次だという、一番最後の数行の問題性は私の目に入らなかった。だから平田さんの指摘は、『要綱』をやはり私は狭い意味での歴史家として読んでいたなという意味では痛烈な反省を迫られたんです。

◇村上　ただ、その実質的自由農が「原蓄」の対象になるという着眼は、この 66 年の「『諸形態』と『農業共同体』に関する覚書」でも出ていますし、「『諸形態』における『奴隷制および農奴制』について」これの中でも出てきます。ですから、かなりそれが一貫した問題意識であるということは確かですね。

◆望月　ええ、問題意識としてはあったけど、それが「領有法則の転回」という、まさに経済学的なタームと結びついていなかったというのは、私の当時の限界でしたね。その点はもう平田さんの功績というのは、私はいくら誉めてもいいと思います。

◇村上　ここでまた、もう一つ質問なのですけれども、先生が一連の『諸形態』研究では最後

の、1966 年５月の社研『月報』に載った「『諸形態』と『資本論』における原蓄期自営農民について」の中で、こんなことを言っておられます。「なぜマルクスは原蓄の対象である直接生産者を小経営的独立生産者としたのか。封建的土地所有を論理的前提としても、十分に説明できるではないか」というように自問されていまして、これについては自問されたままで、ご自分で答えられてないのですよね。

◆望月　ふりかえれば、当時はまだ「労働と所有の同一性」というキー・タームをつかんでいなかったからだ。この同一性を解体するのが原蓄だという定式は、まだあとだな。

◇村上　その後に、実は同じような問題意識がないかを探しましたらありました。それがなんとずーっと後の 1982 年の『思想』論文なんですよ。その５月号で「本原的蓄積論の視野と視軸」という御論文を書かれていますが、ここで同じ問題提起をされていまして、その先生の暫定的な回答として、この時は「第三世界」論の話になっているのですが、「中心部固有の歴史的与件を踏まえた、最適未来像のポジティブな理論的提示というふうに見たい」というように言われている。これも私は意味がよく分からないのです。「原蓄」のタイプを精細に分類するという作業と、結局最後は中心部の、ヨーロッパの原点に戻って実質的自由農の解体こそ原蓄の原点だ強調することの関連が、ですね。

◆望月　そうせっかちに関連づけようとされても困る。あの分類、つまり「資金と労働力」、「始動と加速」、「暴力原蓄と静かなる原蓄」、「政府と民間」、「体系的と散発的」、「国内と対外」という分類には、いろんな狙いがあった。一つは大塚史学が「静かなる原蓄」オンリーに対して宇野派がエンクロージャー一本槍という、自分の土俵から出ないでの論争への警告という意図、それにアミンの「世界的規模での原蓄」という提言への応援の意識があった。もう一つは『資本論』を書いてる時点でもまだ原蓄が進行中、というマルクスの着眼にも注意を喚起したかった。そうだ。ずっと昔のドッブの「資金はどうやって積立ておいたのか」という問題提起の再評価もあった。スウィージーとの論争を論評するなかで、堀江英一さんなんか、せせら笑ってたからね。

◇村上　そういう多面的な例証と、最後の小所有の解体から再結合という図式とは、そう直接的な関連はない、とおっしゃってるようにも聞こえますが。

◆望月　そう。「あれもこれも原蓄なんだ」と山のように歴史的事例を積み上げながら、やっぱ

り、最後に理論的に整理するとなると、「労働と所有の一体性」を典型的に体現してたイギリスのフリー・ホルダーの解体、ということで定式化せざるを得ない。思想の根底に、「労働者こそ真の所有者だ」というのがあるから、それであの、正反合の弁証法みたいな図式で「個体的所有の再建」を打ち出すわけだ。例証をあまり豊富にあげ過ぎたんで、マルクスも収拾がつかなくなったとも言えなくもない。だからと言って、ガルブレイスが「心臓をハンマーで乱打するような」と言った、無残な例証の価値が失われるわけじゃないけれど。

◇村上　封建制から「原蓄」を経て資本制へというので、もう話はできるのに、小生産者、実質自由農の解体を結局は中心にすえるのはなぜか、という問題の問題性ですね。

◆望月　そのとおり。自由な小所有者というのは、言い換えてみると、いわば潜勢的な「市民的所有者」だな。それが、解釈に困る例の「個体的所有」の原点だ。マルクスはのちの『ゴータ綱領批判』でもこのタームを持ち出すんだが、一度も明快な定義を与えていないままだ。平田さんがさかんに「個体的所有の復権すなわち社会主義」と力説していたが、いまだに胸にストンと落ちてこないよ。individuell を「個人的」と訳しても同じだ。もっとも、individuell を＜in＋divid＞つまり「（労働と所有が）分割されていない」と読めば、それなりに理解できないわけではないが。とにかく、内実をしっかりとらえて、「労働と所有の＜事実上の＞一体性」→その強力的な分離→その再結合、というふうに再定式化すべきじゃないのか、というのが僕の考えだ。

◇村上　その視点がないから、原蓄章を読んでも、「封建制から資本主義へ」という話になってしまうんですね。

◆望月　伝統的な図式のほうから読むからそうなっちゃう。

◇村上　ところで、ヨーロッパ中心部では市民的所有の復権だとしても、第三世界では別の原蓄もあり得るということですか。

◆望月　そこが問題だから、「本原的蓄積」論文の最後をああいう形でしめくくらざるを得なくなる。「第三世界での原蓄」というと、「第三世界内部でおこる原蓄」というふうにも聞こえるけど、「資本の本国が第三世界に手をつっこんで遂行する原蓄」だからね。あくまで「本国の・本国による・本国のための原蓄」なんだから、「あとは野となれ山となれ」という強奪だ。たぶ

んそこには「潜勢的な労働と所有の一体性」なんて無いだろう。部族共同体とかカースト体制は、「貨幣または資本の文明化作用」の舞台なんだ。

◇村上　なるほど。しかし話が先に進みすぎました。元に戻りますが、64 年から 66 年の『諸形態』研究のあと、ドイツに留学され、帰国なさって最初のお仕事が 69 年「近世西ドイツにおける市民地主制について」(『専修経済学論集』7 号）ですね。その辺のお話しをちょっとうかがいたいのですが。

◆望月　結局平田論文のショックを受けながら、ゲッチンゲンへ行って、『諸形態』は忘れて西の方を研究しようとしたのです。それと、例の東のグーツヘルシャフト研究も本場へ行けば新しい資料で知見を深められるかなという、よくばったことも考えた。アーベル教授にそのことをちょっと話したら、ゲッチンゲンに東から逃げてきたケーニヒスベルク大学があるから、と紹介状を書いてもらって訪ねて見た。普通の屋敷にちゃんと大学名のプレートを掲げているんだ。大戦末期、ソ連が攻めて来る前に疎開してきたんだね。けれど、図書館でカードを引くと、新しいグーツヘルシャフト研究はポーランド語の論文ばかりで、さすがに諦めた。それで、西の方の研究に限ることにして、サーベイかたがたまとめたのがあの「市民地主制」論文だ。これはドイツの「ジェントリー地主」じゃないか、と読んでて面白かった。

◇村上　この論文は 69 年で、例の「ド・イデ論文」(68 年）のすぐ後に出るのですが、何か関連があるんですか。

◆望月　直接にはないよ。これは一種の留学証明論文だから。ドイツ西部の近世に、ブルジョアジーが地主として入り込んでくるんだ。つまり、要するに、経営能力もないし、だんだん手許不如意になってきた貧乏グルントヘルから土地を丸ごと借り取ったブルジョアジーが農村に入り込んできて実質上の地主になるわけだ。それが市民地主制、ブルジョア地主制だよね。これは、ドイツの農業進化といえば「ユンカー経営」という、東しか見てない型にはまった研究とは対照的だったから、もっと追求していけば面白かったのだけれども、帰国したら、別のテーマが状況をこしらえて待っていた。

　ところで、アーベル教授の紹介状をもって東ベルリンのフンボルト大学にクチンスキー教授を訪ねたら、「あなたと同じようなことをやっている人がいるよ」と、ミューラーさんという人を紹介してくれた。彼はまさに東エルベでの市民地主制の研究をやってたんだ。もっとも滞在期間が限られていたんで、東ベルリンを案内してくれたりしたあと、「この問題で本を書いてる

から、出たら読んで日本の学界に紹介してくれないか」と頼まれた。それが帰国後に届いたので、約束を果たすべく書評論文として書いたのが、「農業改革以前の東エルベ地主制について」（『土地制度史学』70 年）だ。例の『思想』３論文の直後だから、ちょっと忙しくて大変だった記憶がある。

◇村上　ああ、そうすると、この 69 年の「近世西ドイツにおける市民地主制」および 70 年のこの「農業改革以前の東エルベ地主制について」(『土地制度史学』)、この２本はある意味、第一局面の最終的な作品ということでしょうか。

◆望月　言われればそうなるね。それはそれで、追求をしていけば面白かったと思うけれども。でも、それをやっていたらこちらの『ド・イデ』論文が書けない。

◇村上　ところで少しさかのぼりますが、『諸形態』に関する御論文を相次いで書かれていた 1965 年から 68 年ころ、第 1 局面の最後のころですが、少し傾向の異なる 3 本の御論文があります。1965 年「ブルジョア革命とブルジョア民主主義－いわゆる人文学派の近代史研究によせて－」(『現代の理論』1965 年 11 月号)、1967 年「明治維新分析のための世界史的視点について－河野健二著『フランス革命と明治維新』－」(『専修大学社会科学研究所月報』、No.49)、1968 年「西ヨーロッパ型「近代化」理解の一視角－ブルジョア民主主義の歴史的性格について－」(『専修大学社会科学研究所月報』No.52)、この三本です。いずれも「近代」に対して非常に手厳しく書かれており、意外な感じがするのですが。

◆望月　そうとられるとは思わなかったな。平野義太郎に代表される講座派の近代理解に対して厳しいんだ。つまり、史実としてもあり得ないような、もう夢みたいな近代社会を、一つの基軸にして、それで日本の前近代を裁断しているから、そこで間違うのだと言ったわけだ。例えばフランス革命で完全な男女平等が実現された、なんてね。同権を要求した女性はギロチンにかけられてるよ。そういう見方では京大人文研究所の人たちの言い分の方がリアルだ。そこらへんで、私は講座派と、ひいては私の言う「教義体系」の近代理解、とんでもない理想型を基準にして日本は前近代だとする立場から静かに離れた。

◇村上　しかし大きな枠組みとしては、やはり、日本の前近代を撃つという点では、講座派に反対するわけではないと理解していいでしょうか。

◆望月　君は、資本主義の内部の半封建性を「撃つ」のは戦略的に正しいはず、と言いたいのだろうが、講座派正統の言い分では、なにしろ 1945 年までは絶対主義なんで、だから、45 年まで、絶対主義のもとで資本主義が発展しているという図式だよね。これに対して遅れた部分が残っててもとにかく資本主義だというのが労農派。講座派は、明治維新で絶対主義が確立したと言うから、ヨーロッパを物差しとすれば、絶対王制が資本主義を育成して、それで西欧と対抗するという。人文学派は、「過渡期の資本主義とは、そもそもそういうものなんだ」と定式化していた。

◇村上　とはいえ、日本の戦前のですね、特に、大正期から昭和初期にかけての日本の経済構造・社会構造というものが、近代と前近代を、先生の後の御言葉で言えばアーティキュレーションした形できている。こういう問題意識から市民社会派が生まれてくるわけでしょ。前近代の持っているネガティブな側面を近代の側から撃とうという。これが、高島さんや大河内さんや大塚さんから内田義彦さんと続いていく流れでの問題意識でしょう。先生もその流れの中にあるとすれば、大きく言えば前近代を近代の側から撃つ。あるいは近代といってしまうと、また問題ですけれども、市民社会的な諸関係への編成、再編成というか…

◆望月　君の言い分を逆手に取れば、内田さんの言う「市民社会青年」たちは、ある意味で頑固な講座派への内部批判でもある、という風に捉えるべきなんだ。この新潮流は、ともかくも、45 年より前を絶対主義つまり封建制末期の権力などとは考えてないだろ。

◇村上　大まかにいえば講座派も、明治維新は「完全ではないブルジョア革命」と理解しているんじゃないですか

◆望月　たぶん内心では、ね。だけど公けにそれを認めたら、労農派への屈服になっちゃうから、口が曲がってもそれは認めないよ。もちろん講座派にもある種の幅はあるけれど、少なくとも中枢は「ブルジョア革命どころか」というんでないか。『現代の理論』のあの論文（「ブルジョア革命とブルジョア民主主義－いわゆる人文学派の近代史研究によせて－」）に引用した平野義太郎のブルジョア革命の判断基準を思い出してくれよ。近代社会の中に前近代がまだ残っていると言うんではない。天皇制絶対主義という前近代が資本家をも含めて日本全体の首根っ子をがっちり抑えてたいう図式だろう。

◇村上　「絶対主義」を資本主義のもとでも可能な政治システムととるか、封建制の末期政権

ととらえるか、それが判断基準だと…。

◆望月　「ブルジョア革命だったか、否か」というのがそもそも、人を泥沼に引き込む問題設定なんだ。完全な革命なんてあるわけない。人文学派の面白いところは、ブルジョア革命をそもそも「過渡期の革命」と言い切ったところにある。白黒きっぱりつけようとしなさんな、というリアリズムだ。のちに読んだが、カナダのマクファースンは、イギリスを例に、まず「自由主義革命」（クロムウェル革命）が道を開いて、そのあと「産業革命」を経て、普通選挙権の「民主主義革命」が来る、と見た。ジョン・ステュアート・ミルでさえ、労働者の選挙権を制限しようとしてたじゃないか、と言うんだ。

◇村上　今でもフランスの人の心情にはあるでしょ。絵に描いたようなフランス革命像。

◆望月　単純にそうとも言えない。革命史の読み直し論争もあるし、全体主義の始まりだ、なんていう主張さえある。パリにはロベスピエール通りとか広場がないでしょ。

◇村上　ところで、講座派と市民社会論第一世代、さらにこの第一世代と内田義彦氏、その継承と切断の側面があるとして、内田先生と望月先生の世代では、継承関係は明らかなんですが、切断と言いますか、違いはあるのでしょうか。

◆望月　無理に違いをほじくらないでくれ。まして、「切断」においておや。

スミスの「共感」を重んずる内田さんも、資本家的生産関係を扱う場面では、どちらかと言えばだ、労働過程で人間が陶冶されて「類的能力」を持てるようになり、未来の担い手としての「類的人間」に成長する、という面を重く見るようだ。同じことをマルクスも言っているんで、間違いなどではないさ。だが、僕としては、労働過程という、いわば「工場の門内」に入る前に、労働者が賃金をめぐって資本家と対等に交渉しているっていうシーンを、その前に置きたいのさ。だって、資本家は労働者が黙っていても「労働力の価値」どおりの賃金を払うわけじゃないだろう。押したり引いたりの駆け引きの終着点がこれなんだ。そういう交渉なしじゃ、むやみに雇用契約を結ばないぞ、というところまで労働者を鍛えたのは、ほかならぬ分業と交通の世界、市民社会じゃないのか。内田さんが、そこんとこを軽く見ているはずはない。はずはないんだが、ひとを生産の現場に連れて来るときには、「ここは社会的分業の現場でもあるんだよ」と説いて欲しい。ま、そんな希望か。これは無いものねだりじゃないよ。

◇村上　たしかに「方法」は異なるけれど、変革へ持ってゆく筋道の「比重」の違いというわけでしょうか。

◆望月　何とか切り抜けられたかな。そこで思うんだが、市民社会論第一世代も、その成長の栄養は、それ以前の人々の苦闘から吸収されているってことね。小林良正先生も、私の本への痛烈な書評論文の中で、骨肉にしみこんだ感慨を洩らして私を叱ってくださった。突然、特高に踏み込まれて資料や研究ノート一切合切を持ってっちゃう、もちろん返してくれない、なんていう社会の中で思索を重ねられた。学術の論文で、そうした畏敬の念をじかに表すのはむずかしいことだけれど、それを忘れたら「継承」も何もない。

『マルクス歴史理論の研究』へのプロセス

◇村上　さて、それでは正面から市民社会論ということになって、つまり先生が市民社会論研究においてブレイクスルーをするのが 68 年。この年の 8 月に「『経・哲草稿』における事物の疎外と自然の疎外について」(『専修大学社会科学研究所月報』No.59) が出まして、12 月に「『ドイツ・イデオロギー』における「分業」の論理」(『思想』) が出ます。

◆望月　これは言うまでもなく内田さんの『資本論の世界』の影響下にある。要するに『資本論』の中に「疎外」論を読み込んだあの手法だ。見事と言うほかない。

◇村上　『資本論の世界』では労働過程を疎外論として論じられており、『資本論』と大きな違いは「労働過程論」の部分がいやに大きいところですね。

◆望月　「いやに」とは何だ。あれは内田さんの眼力なんだ。

◇村上　あの労働過程論については内田先生ご自身がアルフレート・シュミットの『マルクスの自然概念』から刺激を受けたということを言われていました。内田先生の蔵書が「内田義彦文庫」として図書館に入っていましてね。私はその思考過程の形跡を探ろうと思って、そこにあるシュミットの原本を確認に行きました。原本を一度見せてもらったことがあり、欄外に内田先生の書き込みがあることは知っていましたので。結局あきらめました。どれも字が判読できないんです。

◆望月　そうだろう。あの筆跡を読む特別の解読係が岩波にいたくらい。ところで、あれはシュミット批判のつもりなんだよと、僕も二度ばかり聞かされたけど、どうもピンとこなかった。

◇村上　シュミット批判というのは、おそらく例の大工業制度のとこでのポジとネガのところで言われていたのではないかと思いますけど。シュミットはマルクスの自然概念という場合、人間主体の対象に対する実践性ということを強調し、労働過程の中における人間の認識の拡大深化を、物質代謝過程の一環として理解しています。内田先生はその上で、その労働過程が大工業制度の中でゆがめられ、かつ、しかし労働者は大工業制度への労働力としての適応を強いられることで、むしろ成長して行くということを論じられるところで、ネガティブな側面と、ポジティヴな側面が交互に現れるというところ、それがシュミットにはないということではないかと思うのですけどね。しかし少なくとも「労働過程論」はかなりシュミットを取り込んでいるのではないかと思います。

◆望月　そうなのか、よくわかった。僕は、「お、疎外論というのはこういうところで使えるんだ」と新鮮な思いをしたし、あの大工業を舞台としたネガ・ポジ弁証法の方に目が行ってたから、自然概念の方にはのめり込めなかったんだな。

◇村上　先生の「経・哲」論文の段階では、まだ『ミル評注』への言及はないですね。『マルクス歴史理論の研究』の中で『経・哲草稿』と『ミル評注』がつなげられて対自然、対社会的関係という歴史の規定としての市民社会というのが確定されていくんですね。ところでこのマルクスの疎外の論理について、大学院当時、先生が強調された「アポリア」というのが実はよく分からないままだったんです。先生は「４つの規定は自己撞着に陥っている」と言われました。それは結局こういうことでいいのですかね。つまり、資本主義を前提にしているにも拘わらず「疎外」されざる状態から「疎外」された状態へという叙述になっていると。そこが論理矛盾だということなのですか。

◆望月　微妙に違うな。資本主義を脳裏には前提していても、論理を開いてゆく出発点つまり第１疎外の分析は、労働者は働けば働くほど貧しくなるという資本主義疎外を例証に持ち出しちゃいけない、と言うのだ。例の命題の訴求力というか磁力があまりに強いので、みんなそっちへ引きつけられちゃって、しかもそれを自覚してない。という意味で「事物の疎外論」はマルクス批判だね。それに、「疎外されざる状態」なんて僕の論理から言ったら、そんな状態はそもそもないよ。

◇村上　これに対してはたとえば「疎外」の 4 つは 4 つの類型だという批判がありえますよね。そういう理解の人も多いのではなかったのかと思うのですけど。

◆望月　「も多い」じゃなくて「が多い」だ。あの頃の「疎外」論は、みんな「マルクスが混乱するわきゃない」という姿勢だから、真言の解釈論争になってた。マルクスを絶対視するんなら何だって言える。うんざりしてた。とにかく、労働過程の疎外から資本主義的生産様式の中の疎外へ話をつなげるなら、何か媒介環がなけりゃ論理的上昇なんて無理だ。というのが着眼だった。哲学者や社会学者たちが狭い土俵で言い争っているところに、内田さんが「何やってるんだ、お前ら」というのが『資本論の世界』。経済学の問題として、もとへ引き戻したんだね。

◇村上　もう少し先からふりかえれば、鍵は「交通」概念だったんですよね。その意味でも「望月市民社会論」へのブレイクスルーは、やはり『ド・イデ』論文だったと思います。労働過程疎外論に閉じこもらないで、そこに「分業」を持ってこなくては駄目だと。

◆望月　『ド・イデ』を書いたときには、まだ『ミル評注』を消化していない。だから、「分業」と言っても生産現場での労働能力の相互交換から、いきなり社会的分業に飛んでいた。つまり交換の原理にまで踏み込んでない。『マル歴』にまとめ上げる時には、もう『ミル評注』をしっかり踏まえて、それで「分業」論をやっているから、おそらく、最初の論文とは随分違っていると思います。ニュアンスとして。ただし、君の言う「ブレイク・スルー」ではあった、たしかに。

◇村上　さて、1968 年の「『ドイツ・イデオロギー』における「分業」の論理」が書かれた経緯についてお話し願えませんか。これは一つの画期の御論文だと思うのですが。

◆望月　『思想』という、物書きなら誰も切望するメディアに最初に書く機縁を与えて下さったのは内田先生だ。今もあるかな、神田の「バンジョー」という喫茶店で。一風変わった頑固おやじが、うちのは東京で 2 番目にうまいコーヒーだなんて威張っていた店だ。社研の研究会か何かのあと、その喫茶店で内田さんと話した。そこでウェーバーとマルクスという話になったんだが、私はこんなことを話した。『資本論』のなかに、「これまでの全経済史の基礎は都市と農村の対立である」という、謎かけみたいなフレーズがあるけど、誰もそれに触れてないので真意を探りかねて悩んでいたところ、ウェーバーの都市論を読んでいるうち、あれ、あの命

題はウェーバーで解けるんじゃないか、と気付いた、という話だ。「対立」の原語はゲーゲンザッツだ。「対立」と訳するとケンカになっちゃうが、そうじゃなくて同権者どうしで向かい合う、という把握。それが『資本論』の中にあの命題の真意、鍵じゃないですか。そんな話をしたら、内田さんがおもしろがって、「ぜひ、『思想』で書きたまえ」と、編集部の伊藤修さんに紹介してくれたんだ。

◇村上　内田先生にもピンと響くものがあったんですね、そのアイデアは。

◆望月　それで伊藤さんと話しているうち、この人はぼくの問題意識をわかってくれる人だと確信したから、おそるおそるぼくの構想の底にあるものを話した。「おそるおそる」というのは、『思想』編集部から見たらぼくなんか海のものとも山のものともわからぬニュー・フェースだからね。私としては、当時「ヴェーバーとマルクス」という構図を立てて「ヴェーバーの優位性」を称揚するというのが論壇の風潮であるけど、「少なくとも近代史把握については両者の波長は微妙ながら同調する」というスタンスで書きたい。そう言ったら、それはおもしろい、ぜひお願いしますという。ぼくは、それで気をよくして、いきなり同調と言ったって、「ヴェーベリアン」の腑には落ちないだろうから、まずマルクスの歴史把握の原点といえる『ドイツ・イデオロギー』の分業論から始めないとわかってもらえそうもない、と言ったら、伊藤さんは快諾してくれた。彼は「いいです。先生のご自由にやって下さい。後の方も載せますから。」ということで、いきなり続編も掲載すると約束してくれた。それが書いてるうちに3本になったんだ。

◇村上　先生がここで「ウェーバー」と「ヴェーバー」を書き分けていらっしゃるのは、例の…

◆望月　そう。日本じゃ昔から「ウェーバー」という表記で安定していたのに、ある時、大塚さんが「ヴェーバー」と書いたら、それから大塚史学の連中はいっせいに「ヴェーバー」と濁りはじめた。みっともないくらいに。「そんならあんたがた。ヴィーンに行ってヴァインを飲んだあと、オペラ「魔弾の射手」を観て、やっぱりヴェーバーはいいね」なんて言うのか、とからかってやりたいくらいのものだ。『マル歴』でも「ウ」と「ヴ」はちゃんと書き分けてる。今でも関西じゃ「ウェーバー」だよね。この使い分けは、訳者の韓さんにはピンと来ないはずだから、丁寧に説明したら大笑いしてた。けれど中国語の訳本にはとても書き分けられなかったみたい。

◇**村上**　ふふ。ところで、3 本というと、まず 1968 年 12 月「『ドイツ・イデオロギー』における「分業」の論理」(『思想』534 号)、1969 年 5 月「マルクス歴史理論の形成－分業論的歴史分析の展開－」(『思想』539 号)、1969 年 9 月「マルクス封建社会観の基礎視角－ウェーバーの都市・封建制論にふれて－」(『思想』543 号)。この 3 本の公刊時期はすごく間が詰まっていますね。

◆**望月**　さっき話したろう。もともとがウェーバー都市論なんだ。そこにこの 3 本の構成のもとがあったんだよ。で、一番最後から書き始めると、まだ書かれてないことを前提しなくちゃならないので、読者には不親切になるからね。

◇**村上**　ということは、「『ドイツ・イデオロギー』における「分業」の論理」は、ウェーバー論を書く前の、基礎の部分になるわけですね。そしてこの 3 本の御論文は、まとまって頭の中にできていたんですね。しかも、きっかけは第三論文の方で、『ド・イデ』論文はその前提作業ということですか。私は今まで、『ド・イデ』論文をきっかけに、1970 年 3 月の「マルクス歴史理論における『資本主義』」(日本評論社『講座マルクス主義・8 資本主義』) で 1973 年『マルクス歴史理論の研究』のトルソが出来上がったと思っていました。しかし、そのトルソは 1968 年から 69 年の『思想』三論文だったとすると、『マルクス歴史理論の研究』の最後の付論ウェーバー論は、単に付論以上の意味を持つんですね。

◆**望月**　まったくその通りだから、「第 7 章はそれまでの論理展開とはちょっと波長がちがう問題を扱ってる」と言われると、がっくりなんだ。

◇**村上**　そうですか、これは非常に興味深い『マルクス歴史理論の研究』形成過程を伺うことができました。では、『ド・イデ』論文の内容に戻りたいと思います。いわゆる歴史の基底、カマドですけれども、対自然的・対社会的関係という労働・交換の基礎、ここには対自然的関係としての労働過程論が一方にありますが、先生が『ドイツ・イデオロギー』を読み込まれた上でのマルクスの「市民社会論」というものは「分業」論が重視されています。対自然・対社会的関係性と言いますが、先生は対社会的の方に重点を置かれている。

◆**望月**　それは当然だよ。「労働過程」をいくら掘ったって「市民社会論」にならない。だから、私は労働過程の図式を黒板に書くとき、横には書かないで、必ず上下に書いたでしょ。個体がいて、自然に働きかけて、土の中で育っていたものを掘り出して、自分のところへ「回収」す

るんだけど、自分ですぐ消費しないで共同体へ一度「譲渡」して、他の成員の生産物の分け前も交えて取り戻す（Wiederaneignung）。譲渡はEntäußerungだから「外へ出す」で、つまり「外化」と同じ言葉。いったん外化しないと、実は取り戻せない。これが「疎外」の円環だ。これが『ミル評注』なんだよ。ところが労働過程だけ見てると、いったん外化した自分のエネルギーの成果を、たとえば果物として自分で消費して「あー、うまかった」と満足したんでは、その時点で疎外から解放されちゃう。ロビンソンみたいに。どこへもひろがって行けない袋小路だ。

◇村上　内田先生は『資本論の世界』で「労働過程論」から、あのネガ・ポジ大工業論へと展開されたわけですが、望月先生は、いちど労働過程のもとのもとまで掘り下げてから、社会的分業概念へつなげてゆくというかたちで「望月市民社会論」を作る。これでいいでしょうか。

◆望月　そういうわけ。理念としては、社会からまったく独立した個体はいないんだから、暗黙のうちに「共同体・内・外化→そして取り戻し」を考えるんだが、それを労働過程疎外と社会的交通疎外とに区別したうえで両者を連結させる。両者は切り離そうったって切り離せないんだ。社会的交通疎外そのものが労働過程疎外を含まなければ、そもそも循環はしないのだから。ここが特徴と言えば特徴かな。

◇村上　問題をもう一つの『ド・イデ』のほうなのですが、これは、何回読んでも、「すごいな」と思うんです。というのも、これにはやはり、例えば廣松さんのような批判があり得るのですよね。つまり、全部マルクスが書いているわけではなくて、やはり、エンゲルスの字で書いてある。それに、先生はマルクスの筆跡で書いた部分をまず取り出し、それを分析基準・リトマス試験紙として、『ド・イデ』全体を細かく仕分けられたわけですよね。その作業を想像するとやはり「すごい」。

◆望月　廣松さんはやっぱり『ド・イデ』が全体として完結した思想産物である、という立場、思いこみと言ってもいいが、そう言う立場だから、エンゲルスの貢献を無視するのか、と言って怒るんだ。けど、ぼくは「マルクスの、のたくった筆跡で書かれた文言しか信用しません」という立場を堅持してるから、話は噛み合わない。そのマルクス本人が、ずっと後に「あの草稿（全体）は鼠に喰われたって惜しくはないものだ」と言ってるのに。おまけに廣松さんは『ミル評注』なんて下らない、一時の気の迷いだって切り捨ててるんだから、論争なんかにならないよ。もっとも、あの頃、と言うより今でさえ『ドイツ・イデオロギー』を、まとまった論理体系として完結してると思いこんでる人が大半だけれど。

◇村上　結局、要はその『ド・イデ』の中で、共同体－その中の内部交通－共同体間交通＝第一次分業－所有形態－分業＝交通。で、生産力の巨大な発展から市民社会へという。で将来的に、その普遍的交通を基礎にした共産主義という。それがマルクス的で、もう一方で、エンゲルス的な私有－分業＝私有－階級の系譜。こういう歴史観が対比されていくわけですけれども、この論文で、共産主義像が、「朝には狩りを、夕べには批判を」というような形の分業の話ではなくて、広がり尽くした分業を引き継いだ社会という、そういう将来社会像が浮き彫りにされたわけですね。その中で、「夕食のあとで批判をする」という書き込みをして、バウアーをからかうと見せて、実は当のエンゲルスを批判していたんですね。こういう交換・分業視点というものは、当然、第一局面では蓄積されてこられたことだというふうに思うのですが、どういうきっかけで、この問題意識が生まれたかということなんですよ、

◆望月　「きっかけ」という言葉を、「直接の執筆動機」と言い換えると、もちろん、廣松さんのショッキングな「偽書説」だ。あれが出て、みんな一瞬言葉を呑んだ。シーンとしてしまったんじゃないの。僕は、あの論文冒頭で当時の雰囲気を「学界の異常な沈黙」と書いた。

◇村上　そうですか。やはり、あの廣松さんの発言を読まれたのが、直接の刺激になっているのですか。それじゃ『ド・イデ』に取り組んで見ようという。

◆望月　「直接の」って言ったろ。淵源は「都市と農村の対立」なんだが、廣松説にみんな黙りこくっていたから、「それじゃ俺が」と鉢巻きをしめた。古い言葉では「乃公（だいこう）出でずんば」と言う。

◇村上　そこで『ド・イデ』の歴史把握を真っ２つに分けた…。

◆望月　「疎外」論を「交通」論で腑分けして、さきに進もうとしたら「分業」論しかないじゃないか。要するに、前に立ちふさがっているわけだよ、「エンゲルス主導説」の廣松さんが。立ちふさがっているのに、それをよけるのは卑怯じゃないか。そうは言うけど、岩波文庫版の『ド・イデ』をいくらひねくったって分かるもんじゃない。当時のヘルメット学生たちが『ド・イデ』を盛んに使ったのは、僕の見るところ、岩波文庫版（本文の）最後のしめくくりが「自己の人格性をつらぬくためには国家を打倒しなければならない」という勇ましいスローガンだったからじゃないか。これで「造反有理」とストレートに結びつく。

◇村上　……

◆望月　で、いくら読んだって論理の筋道がつかめない。ああも言い、こうも言う。そこに、バガトゥーリア版『ド・イデ』の花崎訳が出た。個人名だがソ連公認版だね。あれを読むと、岩波文庫の「異文」編であれこれ想像するより、ずっと元の形を想像しやすい。それで、旧岩波文庫、つまりいわゆる「アドラツキー版」による本文を、アドラツキーが丹念に読解して残してくれた「リヒトリーニエン」（編成指針）を読まなければいけないと気付いたんだ。図書館には待ってたように（旧）MEGA が鎮座してた。

◇村上　それにしても、うかがうとウェーバーとマルクスの都市論から下降してきたら、そこに廣松さんの『ド・イデ』偽書説があったなんて、なんだか出来過ぎてるみたいなお話しですけど。

◆望月　そういうのを、またまた古い言葉で恐縮だが、「千載一遇」というんだ。

◇村上　まさに歴史的チャンスだったわけですね。その時はもうマルクスの社会的分業観の骨格をつかんでいらっしゃったんですか。

◆望月　森田桐郎君といっしょに『ミル評注』という飛躍のかけ橋を渡れたのは、もう少し後だったが、分業でいったん分断された諸個人が「社会」の中で再び結合するという、おおまかな構図は頭に入っていた。それで、あの「分業展開史論」を描けたわけだし、それだからこそ、マルクスのとは肌合いがまるで異なる「所有形態史論」の異様さが印象深かったんだね。筆跡問題もさることながら、その点からも廣松さんの、二つを歴史的順序としてつなげちゃう、というやり方が、いわば「暴挙」のように見えたんだ。

◇村上　『経・哲草稿』をやった後に、では次はということで『ド・イデ』をやろうと。でも、その時には社会的分業ということは頭の中には、あったから。

◆望月　「当然、そうです」とは、言いにくいね。Ａ、Ｂをこなしたから、さて次はＣか、というふうな意識じゃない。マルクスとウェーバーの「都市と農村のゲーゲンザッツ」把握から下降してきたら、そこに廣松偽書説があった、と言ったろう。当然、社会的分業こそが市民社会を築いてゆくのだ、という大きな構図をふまえていたから、廣松さんの「財産（「所有」と同

語のアイゲントゥム）形態史論」という把握が、平板な発展段階論と見えたんだよ。これじゃ教義体系とおんなじじゃないか、とね。もっとも文字にはそう書かないけれど。

◇村上　それは「経・哲」論文の頃からあったわけですか。「分業」の重要性という発想は。

◆望月　何だか繰り返しになってるが、その質問には「そうじゃない」と答える。だって「経哲」第１草稿と取り組んでた時の焦点は、事物の疎外つまり超歴史的な「自然との物質代謝」過程で起きる疎外と、煙もうもうエンジンごうごうの工場内部での資本主義疎外を、いわば無媒介につなげてた。ヒント満載、思想山盛りだが、論理の骨組みがない。これじゃ、第 2，3，4 規定と書き継いだって、社会的分業は紡ぎ出せないよ。

◇村上　余計なものだと。僕は大学院のときに、「ここで類が突然出てくるのは何なのだ」ということを先生に言われて言葉につまったことを憶えています。つまり社会的分業視点のないまま、類が唐突に出てくることを指摘されたのかと思うのですが。

◆望月　だから、「事物の疎外」に話を純化すれば、第１草稿もまあまあ読める、としたんだ。あとは、言葉は悪いけど哲学に淫したエッセイだね。横道に入りこんでる。『経・哲草稿』の話はもういいじゃないか。

◇村上　社会的分業に関しては『経・哲草稿』を腑分けしてゆくさい、もうすでに先生の中に想念されていたと理解してよろしいですね。思えばデビュー作の「騎士団国家の市場構造」でじゅうぶん社会的分業が意識されておられたわけですからね。で、まとめれば、分業分析の展開というのは、1968 年以前の先生のご研究の第一局面の蓄積による、ということでいいのですね。

◆望月　それでいい。だからこそ、「広がりつくした世界的分業、これこそ次なる社会建設への大前提なのだ」という把握、これがもう、大地を打つ槌がはずれてもマルクスなんだと、いう確信を持てた。

◇村上　ですから僕が、感心という言い方は失礼なのですけれども、感心するのは、要するに、さっき言ったように批判はあり得るわけです。廣松さんの「エンゲルス主導説」がその典型ですが。

◆**望月**　まじめに考えて見なさいよ、というんだ。世界大的分業の次に来る社会が「朝には狩りを、昼には魚とりを」だなんて馬鹿な。生産力の巨大な発展のおかげで、たっぷりとれる長期休暇を、湖畔の別荘で過ごせるから、とでも言うのか。

◇**村上**　私は、先生の、歴史認識における分業・交換の重要性という、ご研究の第一局面で培われたご自身の問題意識が『ド・イデ』に直行したというストーリーを描いていましたが、そう簡単ではないんですね。「歴史における千載一遇」だったわけでした。

◆**望月**　じっさい、問題意識だけが勝手にふくらんで先行しているのではないよ、絶対に。で、話をもとに戻すと、僕はバガトゥーリア版に接してすぐに図書館に行って、「マルクス・エンゲルス・アルヒーフ（通称ＭＥＡ）のリャザーノフ版と、旧 MEGA のアドラツキー原文を全部コピーに取り、それにリヒトリーニエン（編集指針）にある筆跡表示をそっくり全部、バガトゥーリア版（花崎訳）に書き込んだ。それで、全貌が手に取るように見えてきたんだ。大学院で講義をするときにもあなたたちに見せたろ。

◇**村上**　はい、見せていただいています。特に花崎版で筆跡からマルクスの論理であることがはっきりしているもの、そこから導かれるマルクスの歴史認識、それらを自分でも書き込めというようなことも言われました。

◆**望月**　ありがたいことに、中国語訳者の韓立新さんは、解説で「望月は、廣松版が出版される前に、「自分の廣松版」を作って、それで自説を主張できた」と書いてくださった。その望月勝手本をもとに、あの「広がり尽くした分業」という一点から全体を読み分ける。要するに、筆跡から見て、ここだけが絶対マルクスの文章だと断定できるパラグラフ。これに合うか合わないかというので基準を決めると、こういうようにやったわけです。だか全体をマルクスとエンゲルスの緊密な協業の成果、ひとまとまりの体系として理解をする必要は全然ないし、無理にまとめようとしたら、それはもう論理の書じゃなくて信仰の書になっちゃう。要するに、『マル歴』で書いたようにこれは一種の悲劇的な産物なんだと言うわけだ。だから、分けて見せること自体が目的ではないのだよ。廣松さんの私に対する批判はね、だからまったくの的はずれ。「じゃ望月は全体をどう把握するんだ」というのだから。廣松さんの私への批判は対談形式だったんで、僕は答えなかった。あれはきっと廣松さんが自分で書いたのだと思うけど。

◇**村上**　先生も、お返しに対談形式でやられましたね。

◆望月　そう。あのとき、明治学院大学の学生が「反論のインタビュー」を、って言って来たから、いくらかおしゃべりして、「『ドイツ・イデオロギー』の持ち分問題をめぐって」、『Neue Zeit』、明治学院大学経済学会、1975/3）という対談ぜんぶ自分で書いて渡した。学生の雑誌だけれど、彼らはきっと廣松さんに渡すに決まっているから、あれでいい。僕がそれ以上書かなかったのは、何と言っても廣松さんに触発されて『ド・イデ』と取り組むようになったんだし。当時の僕は廣松さんを深く尊敬してたから、彼の最大の傷口を「これでもか」とごりごり切開したくはなかったんだ。

◇村上　「朝には狩りを」という共産主義像は、それなりに魅力的で、今でも理想とする人はいますから。われわれも学部学生の頃はそうでした。しかし大学院で先生から冷水をかけられました。社会的分業がなくなるわけないじゃないか、と。

◆望月　さきごろも、ある大学の研究論集をパラパラめくってたら、「マルクスの共産主義像は、『朝には狩りを』だった」とか書いてあった。

◇村上　いまだにあるんです、そういうイメージが。

◆望月　何をか言わんや、だ。

◇村上　先生が腑分けされた「分業展開史論」の終点は「ひろがりつくした分業」ですけれど、具体的にはどんな世界像を描いていたんでしょうね。

◆望月　無理難題というものだ。当時の彼はボン、ベルリン、ケルン、パリ、ブリュッセルしか知らない。あ、ロンドン旅行もしていたな。いずれにせよ、机の上に世界地図を広げて考えているわけじゃないだろう。

◇村上　この社会的分業という視点は、「平田市民社会論」では、どのようなかたちで生かされているとお思いですか。あるいは…

◆望月　それも泉下の平田さんに聞いてくれ。平田さんの学風というのは、マルクスを深く読みぬいて、ご自分でどんどん独自なタームを鋳造しては組み立ててゆくというふうに見えるから、僕にはついてゆけないところがある。

◇**村上**　平田さんは個体的所有というところに最も力点を置きますから、その基底のいわゆる本源的所有を「生産活動」・「類帰属」・「意識関係行為」というように規定されます。この個体的所有を体現した個人は、確かに類＝協同体に帰属して、相互に意識関係行為を持つということになっており、個人の協同的関係を重視しています。また平田さんは市民社会について論ずるとき、交換・分業・交通関係であることも主張しています。確かにそうなんですが、やはり「個体・個人」が起点に置かれていると思われます。はなはだ漠然としていて恐縮なんですが、平田さんは「個人」の交換・交通を表象され、これに対して望月先生は起点が交換・分業・交通の方に置かれ、「個体・個人」とは、この交換・分業関係における「個人」ということなのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

◆**望月**　だからと言うわけじゃないが、僕は「個体的所有」という言葉の解釈にはつきあわない。『資本論』原蓄章のあの箇所と、しばらくお休みして『ゴータ綱領批判』にも出てくるけど、マルクスは何も自説語解をしてないんだ。「コメントできません」としか言えないな。

◇**村上**　「個体的所有」といっても、スタート地点では共同体の内部にいることは確かですが、しかし個体として働くということのほうに力点がおかれていると、その「所有」が姿を見せるのはやっぱり労働過程ということになるんじゃないですか。まあ平田門下の方々から反論されても応える用意のないイメージなのですが。

◆**望月**　共同体への譲渡を通じてはじめて「共同体・内・個体」として承認される、という構造が背景に想定されているのかどうか。あ、これは「コメント」かな。

◇**村上**　そうすると、やはりそこのあたりが基本的な違いかもしれないですね。ひとことで言えば「共同体内→社会内分業」を歴史の基軸として重視するかどうか。

◆**望月**　何かしら物を作って「これは俺の所有＝財産だ」と主張するところから出発するなんてルソーじゃあるまいし。廣松さんを持ち出さなくても、人間は広義の共同体つまりなんらかのゲマインヴェーゼンの中で生まれ、そこの他者から存在を承認されてはじめて成長する。そこで他者が欲しがるモノを作るのが、おのれの存在証明なんだから。その意味でも、原蓄章末尾のあの「個体的所有」から始まる弁証法は、そっとして床の間に飾っておけばいいんじゃないか。

『マルクス歴史理論の研究』

◇村上　さてそろそろ『マルクス歴史理論の研究』のほうに質問を移させてもらっていいでしょうか。1973 年に『マルクス歴史理論の研究』が、1968 年、69 年『思想』三論文と、直前の『講座マルクス主義』論文をトルソーとして、それがまとめられた形で出るわけですが、この御本の中では、前半が『経・哲草稿』と『ド・イデ』を中心にした初期マルクス研究ですね。私はちょうどその時期に大学院にきたものですから、最初はブルーノ・バウアーとの関係で初期マルクスの勉強をしました。

◆望月　何でブルーノ・バウアーに目をつけたんだっけ。もう忘れたから聞くけど。

◇村上　あれはやはり自覚の論理というのが学部の頃からずっと気になっていまして。われわれの学生時代の 1970 年をはさんだ時期というのは、まさに自覚によって運動を、自覚によって街頭へ、という時代でした。だから抜き差しならない位置からの決起というわけではないので、いつでも身を引くことができます。自分もそうでした。この論理は弱い、自覚の論理ではない運動論というのはないのかと思っていました。だから大学院のゼミで一年目は『諸形態』の原書がテキストで苦労しましたが、同時に『マルクス歴史理論の研究』校正段階の目次を見せてもらい、2 年目にその講義を先生から受けました。そこで『ヘーゲル法哲学批判序説』の自覚論を先生がサラッと切って捨てられたりするのを伺って、あるいは社会的分業に身を投じることの重要性を説かれた先生の「市民社会論」に魅力を感じまして。私は学生の頃、まさにこの『ヘーゲル法哲学批判序説』を読んで「自覚の論理」を糧にして街頭に出ていて、そこから退場するとき、この論理のはかなさもまた「自覚」していましたから。B. バウアーの「普遍的自己意識の獲得」というのは、この自覚論で、それを批判するマルクスに着目したということです。

◆望月　ははは。市民社会というのは、いやだと言っても、交通・交換に巻き込まれているうちに人間が鍛えられるので、別に「俺は市民だ」とか「市民にならなくちゃ」だなんて自覚しなくていいんだ。水増ししたり手抜きしたりした「商品」でもうけようとしたって、いずれは市場から淘汰されちゃう。「こりゃいかん」と学ぶんだ。だから僕には、「市民になれ、目覚めよ」っていう運動論なし。僕の市民社会論は、sollen の向精神薬じゃなく、漢方薬だ。じわじわと効く。

◇村上　先生の場合、社会的分業関係の中に自らの身を投ぜよ、と言っておられるように思います。その場合、私はウェーバー『職業としての学問』の最後のパラグラフで、「おのれの仕事に就き、人間的にも職業的にも「日々の要求」を果たせ」という警句を連想します。この部分に関してはウェーバーと望月先生は共通するな、と。もっともウェーバーは「各人がデーモンをみいだせばそれは容易だ」と言いますが、その点は先生なら逆で「そうやれば、デーモンも見つかるだろう」ということになるかもしれません。そうそう、大学院ときの話ですが、『ヘーゲル法哲学批判序説』の中にあった「武器の批判は批判の武器にまさる」というフレーズ、あれは文章的には非常にレトリックが効いていて魅力的なのですが、そこのところを先生はぴしゃっと批判されたんです。こう言ってるけど、これだったら問答無用の観念論だと。そういう意味ではマルクスはまだヘーゲル左派の中にいるということ言われたんです。あれは印象的でした。そこからマルクスは脱却して『ド・イデ』で「朝には狩りを」するバウアー批判となる、ということも先生からうかがいました。

◆望月　「武器の批判」て「武器による批判」でしょ。はっきり言えば暴力革命だものね。ああいうレトリックに、マルクスは自分で酔ってしまうところがある。特に初期に。「批判的批判の批判」とかね。レトリックで思い出した。『ゴータ綱領批判』でマルクスが「各人はその能力に応じて、各人はその必要に応じて」という名文句があるだろう。教義体系は、これを天才的命題だなんて持ち上げるけれど、「各人は…各人には…」というパターンで、当時はいろんな連中が競っていたんだ。それを詳しく注記しておいたら、「初めて知りました」と言ってきた人がいる。

◇村上　さて『マルクス歴史理論の研究』の中で、前半が「初期マルクス」研究、後半の『経済学批判要綱』研究の中では、３つの柱があったと思います。「依存関係史論」、これが１つ、もう１つが「領有法則の転回論」、もう１つが『諸形態』、これらの研究が柱となって『要綱』研究ということになっていると思います。

◆望月　「後半が『要綱』研究」というのは、ちょっと気に入らないね。『要綱』共同体論の研究は、第７章「マルクスの古代・中世社会像」の最後の踏み台なんだから。

◇村上　あ、失礼しました。実を言えば第７章は内田義彦先生も敬遠されておられましたが、私もちょっと苦手な章なので。いずれあとでご見解をうかがうこととして、『要綱』研究で一番ご苦労なさっているのは「依存関係論」のように見受けられますけど。

◆望月　ここもまた弁証法になっていて、第１の人格的依存関係、第２の物象的依存関係については、一般には「…から…へ」という段階移行論と解されているけれど、僕はそう単純じゃないと思った。それはともかくとして、「依存関係論」の難所は、あの第三段階、「自由な個体性のアソシアシオン」という未来社会像。ドイツ語が言葉足らずで真意がつかめない。

◇村上　これまでの普通の解釈は、段階論ですよね。その中で先生は「人格的依存関係」といっても人格だけで人はつながれるわけじゃない。実はその内部にというか、深層に未発達ではあるけど「物象的依存関係」を抱え込んでいるはずだ。つまり萌芽として潜在していた「物象的依存関係」がいかに全面展開するか、第２段階で。そういうふうに定式化なさった。これに対してはやはり批判もあったのではないかと思うのですけれども。

◆望月　『マル歴』のなかでちゃんと注記しておいたが、この依存関係史論を世界史の理解に使ったのは芝田拓自さんだ。だが教義体系からは無視されていたらしい。内田さん、平田さん、それに私などが大きく取り上げたものだから、教義体系も、もともと我々が発見したんだという顔をして、「人格的＝前近代的・社会関係」という「いかにも」的解釈をはじめたので、それをからかった論文を書いた。知らないだろ。

◇村上　はい。でも、「人格的＝前近代的」という図式なら内田義彦先生もそうじゃないですか。ともあれ、「人格的依存関係」を単純に前近代の社会関係だ、と楽に定義してしまわないで、その中にも潜在的に「物象的依存関係（的なもの）」がなければ、人格的依存そのものも成立しないのだ、その後に、商品交換の全面的展開という舞台が整うと、物象的依存関係が本来の姿で表面に出てくるという論理を紡ぎ出されたのは望月先生ではないかと思います。何せ分業・交換なくして歴史なし、ですから。物象的依存関係の歴史的展開は先生の歴史認識にとっても重要な論点になります。しかしあの辺は相当御苦労されたのではないですか。『現代の理論』の対談などでもそれが伺えたのですが。

◆望月　ええ、平田さんもそうだけど、たいていの人は、人格的→物象的、というのを、いわば発展段階と見てる。その固定観念を解きほぐすには、どうすればいいか、と思って。両者はいわば「あざなえる縄」なんだというのを、大学院のゼミで配った図式で示したでしょ。『マルクス歴史理論の研究』でも図式を使えばよかったかな。この本の中国語訳者とは別の研究者がうちに来た時、やっぱり依存関係が難しいと言ってたので、ゼミのあのプリントをコピーして説明したら「なーるほど」と言ってました。

◇村上　はいはい、大学院時代に先生からいただいたプリントはすべて保存していますし、あのプリントは特に印象深いです。人格的関係とはコネだとかだけで片付けるんじゃないんだということで。

◆望月　はじめから「コネ」だと片付けちゃうと、もう全体が見えなくなるよ。人格だけ同士の「依存関係」なんて、安易に仲の良い友だち同士の助け合い、なんてロマンを表象してるんじゃないの。それはそれでいいが、世界史にはならない。この下、というか深層にやはり「物象的依存関係」が無ければ成り立たない。図で書けばなるほどと言ってもらえるのに、言葉でだけ書くとなると、ちょっと苦労する。もうひとつ、あの中で苦労したのは、マルクスがあそこで「騎士と下僕」とか、「僧侶と信者」とか、ナンセンスな例を持ち出したからだ。

◇村上　だから、あそこはもう解釈で割り切るというような言い方もされていたようですね。先生は『現代の理論』1974 年 6 月 125 号の特集「マルクス研究の現段階－『経済学批判要綱』研究の問題点－」（沖浦和光・細見英・望月清司・森田桐郎・山田鋭夫）座談会（45 頁）で次のように言われています。長くなりますが、引用しますと、「依存関係という人間の関係様式のなかに、『要綱』は君主と家臣とか封建軍隊の隊長と兵士とかカースト成員間の関係を入れています。『資本論』の物神性論では、有名な僧侶と俗人の十分の一税収取関係も入れてありますね。商品論や貨幣論の次元の人類史把握としますと、そういう封建的なタテの関係をもちこむのは理論を濁らせるだけではなかろうか。しかしほかならぬマルクスが二度もそういう例をもちだしているのだから、何か自分のほうに理解のゆきとどかぬ部分があるのかも知れない。そんなふうに悩んだ挙句、『講座マルクス主義・第八巻』の論文では、目をつむってエイッとばかり「これはマルクスの錯誤だろう」と書いたものです。といいますのも、依存関係とは人格的にせよ物象的にせよ人間の交通関係なんですが、その依存しあう人間は誰でもいいのじゃなくて、生産者でないと困る。」

◆望月　わかりやすい例はないかな、なんて考えていて筆が滑ったんだろう。よくそういうところがある。後世の者には迷惑だ。

◇村上　『マルクス歴史理論の研究』の後にも、あらためてモンテスキューの「人格的・物的奴隷制」の区別から始まって、ルソーやヘーゲルに「依存関係」概念のフォローをなさってましたね。ルソーはマルクスと逆で「物的依存＝自然的」、「人格的依存＝社会的」、それをマルクスは反対に使ってる、っていう講義を大学院でなさった。

◆**望月**　そうです。「人格的、物（象）的依存」という二分法は、何もマルクスの発明なんかじゃない、とわかってから自分の中でクリアーになってきた。要するに「ゲマインヴェーゼン」はまず「ゲマインシャフト」としてスタートするけれども、しかしその「ゲマインシャフト」的な構造の基底に、いわば隠れたゲゼルシャフトがあるからこそ、次の段階で両者の位相が逆転する、というわけだった。「ゲゼルシャフト」と「ゲマインシャフト」の重層構造というのは、『要綱』の前の『哲学の貧困』にヒントが潜む。

◇**村上**　『哲学の貧困』分析のところで？

◆**望月**　そう。「ゲゼルシャフトリッヒェ・ベツィーウンク・デア・ペルゾーネン gesellschaftliche Beziehung der Personen」（人格の社会的関連）、と「ゲゼルシャフトリッヒェス・フェアヘルトニス・デア・ザッヘン gesellschaftliches Verhältnis der Sachen」（事物の社会的関係）、この区別だ。人格同士のつき合いが基礎にあるから、物相互の関係が生まれる、という『経済学批判』の用語法に注意を喚起したところ。中国語の訳者は、「これまで中国のマルクス訳は Beziehung と Verhältnis を区別しないで両方とも「関係」と訳してきたが、これで両者の相違がわかった、と解説で書いてくれている。

◇**村上**　先生の今のようなご説明、先生のご研究第一局面を調べた後では、僭越ながら以前よりかなり明瞭に理解できるようになりました。つまり中世の農村共同体の中で生産しながら、次第に自己の生産物剰余を交換の場に持っていく農民を想像すると分かりやすい。先生はそうしたご研究を第一局面でやられていた。その意味で、先生のご研究の第一局面はマルクスの歴史理論研究の第二局面とつながっていると実感します。ただ僕は、最初に先生の『マルクス歴史理論の研究』を読んだ時、『哲学の貧困』のところと、依存関係史論をあまりつなげて読んでいませんでした。

◆**望月**　それは僕にも責任がある。前の方は重苦しくて、もたもたした書き方だ。でも、あの「ダンスパーティ」語のところぐらいは読んでくれたろう？

◇**村上**　ええ。あそこは私の「協会」研究にもヒントがいっぱいありました。

◆**望月**　「タンツゲゼルシャフト」というと英語の「ダンスパーティー」になって、「ゲゼルシャフツタンツ」とひっくり返ると「社交ダンス」になる、ここで鮮やかに初めて「ゲゼルシャフ

ト」という関係の含意が浮かび上がると。参加しないと踊れない、こまめに顔を出していないと、要するに上流「ゲゼルシャフト」からも脱落してしまうという、ここ自分でも気に入っている一節だ。学生が「Machen wir Gesellschaft？」というんだね。これ実際にゲッチンゲンの大学寮で暮らしていた時の言葉で、今も耳に残っている。Machen wir のところを「マッヒェンヴァ」と発音するんで「え？」って聞き返した。

◇村上　「付き合おう」というのですか。

◆望月　いや違う。「コンパやろうぜ」と言うんだ。

◇村上　その言葉「ゲゼルシャフト」、ドイツ 1948/49 年革命期に「何とかゲゼルシャフト」などと出てくるときは、「何とかクラブ」と訳すことにしています。原語は「タバコ・ゲゼルシャフト」とか「コーヒー・ゲゼルシャフト」とか。

◆望月　なるほど。コーヒー飲んでおしゃべりを楽しむ「クラブ」か。昔の日本語訳の「倶楽部」だな。構えて説明するとなると難しいが、「喫煙ゲゼルシャフト」なんていいねえ。禁煙ファシズムの時代だから、まさに秘密結社だね。「結社」、うん。

◇村上　嬉しそうですね。ところでそれ以外の『マルクス歴史理論の研究』の主要論点のひとつ、「領有法則の転回」論に関しては、その後、山田鋭夫さんが『経済学批判の近代像』（有斐閣、1985 年）で平田図式を修正したりとか言うことはあったのですが、注目すべき、というのは変ですけど、あとで、廣松さんが取り入れますね。『今こそマルクスを読み返す』（講談社現代新書、1990 年）で。

◆望月　ははあ。その本は知らなかった。廣松さんもね。

◇村上　はい。先生は、『マルクス歴史理論の研究』翌年の『コメンタール『経済学批判要綱』（下）』（1974 年）に「先行諸形態論」を書かれて、領有法則転回論を詳しく敷衍さなっておいでですね。これに対する批判というのはなかったんですか。

◆望月　ないさ。教義体系はまるっきり無関心なんだから。『資本論』の「取得法則の転変」論、つまり算術的な「原投資極小化」論で充分なんだろう。『要綱』の「食いつぶし転回論」の思想

性は彼らにはどうでもいいんだ。

◇村上　もう一つの『諸形態』研究というほうも、これはほとんどもう、先ほど言われた一連のご研究の中で、自家薬籠中のものにされてるものを展開するわけですね。『要綱』の中いちばん筆に熱がこもっているというか。

◆望月　あたりまえだ。アジアの「総体的奴隷制」とか、イタリア半島の「都市と農村の対立」とか、例のゲルマン的散居農村とか、もう、料理の腕をふるう食材に事かかない。あそこはほんとうに楽しみながら書いている。

◇村上　でしょうね。『マルクス歴史理論の研究』は、一応そのように前半の「初期マルクス」研究、後半の『要綱』研究、その中の３つの「依存関係史」論、「領有法則転回」論、『諸形態』研究があるわけですが、一番ちょっと分かりにくいのが、第７章ですね。「マルクスの古代・中世世界像」のところ。ここでいわゆる、それまで蓄積されてこられた「農奴」・「奴隷」、「奴隷および農奴」という問題と、それと「中世都市の意味はこうである」ということが書かれると思うのですけれども、まだもう一つ、そういう印象的な部分があるのですが、『マルクス歴史理論の研究』の全体の中にどう位置付けるかということがよく分かってなくて。ここの部分がちょっと…

◆望月　ブルータス、お前もか、だ。中国の訳者も「総説」の中で「第７章はやや特殊な歴史問題である 」なんて書いている。ところが僕の中ではそうじゃないんだな。第６章までは、ここを書くための序章と言っても過言じゃない。なかでも、「中世都市」の問題は熱をこめたところだ。ここに、マルクスの「奴隷制もしくは農奴制」という特異なタームと、「社会的な分業」把握との結節点がある、というぐらいのものだ。。

◇村上　平田さんの「中世自由都市」論を批判なさってますね。

◆望月　「中世自由都市」、これこそまさに「近代民主主義」の揺籃なのだというのが、平田さんの牢固たる信念。これを粉砕しないと、マルクスの歴史理論にならない。

◇村上　他の人も、みんなそうなんじゃないですか。

◆**望月**　というか、悲劇的なまでの歴史常識になってる。日本にも「堺」みたいな自治都市があったけど封建勢力の抑圧で「育たなかった」とか。そんなんじゃないんだ。

◇**村上**　都市貴族の寡頭制。

◆**望月**　そう、都市の自治ったって、実は商人寡頭制。しばしば市外に土地を持って、農奴から搾取している市民なんだよ。「これがどうして自由都市だ」と。「都市の空気はひとを自由にする」（Stadtluft macht frei）という言葉があって、領主支配を嫌って逃げてきた農奴も市門をくぐった途端に自由民になる、なんて無責任なことを書いてる本が多い。市門をくぐったって農奴身分は変わらない。元の領主が「解放」しなけりゃね。市の役人が「人頭税」をかわりに取り立てて元の領主に渡していたくらいだ。

◇**村上**　ローテンブルクなんて綺麗な中世都市を見てても、わかりませんね。

◆**望月**　そうだろ。平田さんは城壁の中しか見ていない。これは平田さんが学生の時、その講義を聴いた増田四郎さんの、いわば一橋史学だね。大塚さんが「商人」というと必ず「前期的」という形容詞をくっつけて後ろ向きの保守反動だって言うだろう。増田四郎さんが、全身に力こぶを入れて、中世自由都市の礼賛をしたのはそのせいだろう。中世自由都市の典型みたいなハンブルクなんかでも、実態は人口１万６千人のうち市民は２千人しかいない、あとの住民１万４千人くらいは市民権を持たない単なる住民なんだ。ギルドにも加われない単なる「雑業層」だね。船荷の人足、荷車押し、通りの糞尿掃除をやったり。平田さんがいわば常識を味方にして「中世の自由都市＝近代民主主義のゆりかご」論をやっているのを放置してたら、「市民社会」論が前に進めない。それをひっくり返すためには論理だけじゃなくて、史実の問題として、しかもだ、誰もが認める権威をひっぱり出してやるしかない。そこでウェーバーを有力な味方につけたんだ。

◇**村上**　中世における「市民社会」の起源は自営農民の交換の場としての小都市だという、あれですね。第一局面の成果がここに現れる。

◆**望月**　そうだ、そこでこそ労働と所有の同一性が、まさに等価交換として発揮される。それなしにはゲゼルシャフトの世界史は完結しないんだよ。

◇**村上**　その意味では、第一局面で出た「グーツヘルシャフト成立前期と騎士団国家の市場構造」、そして 1969 年『思想』三論文のひとつ「マルクス封建社会観の基礎視角－ウェーバーの都市・封建制論にふれて－」（『思想』543 号）の真意が最終的にここに出てくることになっているのですね。

◆**望月**　君はあまりうまく整理しすぎるくせがあるが、ここではその通りだと言おう。

◇**村上**　前一度、「望月市民社会論」（「望月市民社会論の累重的形成」、『専修経済学論集』第 35 巻 1 号、2000 年）について書いた時に、「グーツヘルシャフト成立前期と騎士団国家の市場構造」つまり初期望月＝第一局面と、『マルクス歴史理論の研究』つまり第二局面とのつながり、ここ面白いと思って書いたところです。

◆**望月**　それともうひとつ。僕なりに格闘した「ウェーバーとマルクス」と、大塚史学ないしプロ大塚史学の「ヴェーバーとマルクス」との決着をつけなければ、という問題があった。その問題意識は、『思想』の連載論文の最後で、早くから述べていた。

◇**村上**　ご本の中の「付論」ですね。

◆**望月**　結局内田芳明さんとか、マルクスとの関連に関心があるヴェーベリアン達が、「マルクスの唯物史観はもう物質が最優先で、精神なんか後回しだ」という。彼等の書いている唯物史観というのがまるでもう中学の教科書みたいな唯物史観で、そういう漫画みたいなマルクスに対するウェーバー優位、とか論じてるんだな。「ところがヴェーバーはそんなこと言ってませんよ」と。けど僕が読むと、ウェーバーの中にマルクス的要素、しかも学ぶべき要素はいっぱいあるんだ。これはいつか以前に話したけれども、この本を書いたときに、書店の肝煎りか向こう側の要求か知らないが、大塚史学の面々が 6 人くらい集まってきてウェーバー解釈について詰問されたんだ。あとで大塚さんの講座を継いだ関口尚志さん、共同体論の住谷一彦さん、それに山之内靖さんもいた。あと 3 人は忘れた。

◇**村上**　詰問とはまた厳しいですね。

◆**望月**　いや、それは言葉のアヤだが。それで議論しているうちに、「そう言えば望月さんのウェーバー理解にも一理はあるな」ということで、最後は不得要領という感じだったが、とも

かく納得してもらえたと思ってる。

◇村上　少しは緊張なさったでしょう、相手が６人では。

◆望月　「そんなにマルクスに似ているか」という話だったが、一番記憶に残ってるのは、みんなウェーバーの『一般経済史要論』の荘園制論のところ、つまり「グルントヘルシャフト」の定義として「奴隷」というのが出てくる箇所、そこを読んでないらしいのが解って肩の力が抜けたこと。ウェーバーの封建制概念は、おどろくほど広い。古代エジプトやスパルタまで入るからね。ところが、日本のヴェーベリアンは、無意識のところで教義体系になじんでいるから、「グルントヘルシャフト」と言うと、ヨーロッパ中世しか想起しない。そこで要件として「奴隷」なんか出てくるから、敬して遠ざけたまま、あとはそこを腫れ物扱いしてる。その箇所。

◇村上　先生はそれを学生の頃に読まれたのですか。大塚さんの『共同体の基礎理論』が出た時すぐに「こりゃマルクスともウェーバーとも違うぞ」と直観した、とおっしゃってましたが。そういえば「「共同体から市民社会へ」視座の問題―比較体制論的関心から―」（専修大学社会科学研究所『社会科学年報』第７号。1973 年）も、大塚さんと距離を置かれている。

◆望月　いや、院生の頃だ。『要論』上巻がでたのは昭和 29 年だから。訳書が出てすぐに取り組んで、散々悩んだ。で、翌年だったかに大塚さんの『共同体の基礎理論』が出た時、「何だ、こりゃ」と思った。読めば分かるけれども、ウェーバーは 五重丸を書いて、一番真ん中に三圃制の共同体村落を置いている。彼の時代には「ゲルマン古代」にも三圃制と集村があったというのが定説だったんだな。しかしその後は完全に否定されている。とにかくあの五重丸図は、ウェーバーの意図ではゲルマン古代の村落の説明なんだ。ところが大塚さんはそれを「封建社会の村落」の説明に使っている。混乱を増幅するのは、大塚さんが、「ゲルマン的」という形容詞を、「封建的」の意味に使っていることだ。

◇村上　えーと、ちょっと混乱してきました。

◆望月　そうだろ。「ゲルマン的」と言ったら常識的には「原古ドイツ的」と決まっている。時代的な制約からくるウェーバーの間違いには知らん顔して、それをマルクスにつなげているから。もう無茶苦茶なんだな。マルクスがはっきりと「ゲルマン的共同体は村落に集結していない」、つまり「散居制」だと書いているのに、それには口を拭って「ゲルマン的イコール封建的・

共同体」というのだから、歴史を知らない人たちは「あの大塚さんが言うんだから間違いないだろう」となる。以来マルクスの「ゲルマン的」とは「封建的」のことなんだという、とんでもない誤解が横行することになっちゃった。

◇村上　あ、そうなんですか。私は学生の時あれ読んで非常に魅力を感じたんですけど。

◆望月　どうしてこんなでたらめを書けるのかと思って。私は『共同体の基礎理論』までの大塚さんに対してずっと抱いていた畏敬の念が、それで泡のように消えちゃった。

◇村上　先生の大塚史学にたいする厳しいご意見には驚きました。それで思い出したんですが、先生の御論文「宇野経済学を支えた宇野史学－大塚経済学との対比において」（1977 年『経済評論』7 月号）について、僕は、大塚さんよりも宇野さんの方に先生の好意のようなものを感じたんです。先生にそれを言ったら「それは読み間違いだ」と言われましたけど。

◆望月　やっぱり読み違いだ。ただし人間としての宇野さんが好きだから、外野からオビチュアリを書いたんだ。その好意が文面ににじみ出たからだろう。それと、歴史認識に関する限り赤ん坊みたいな素朴さを隠さないとこも。何かと言えば「商品は共同体と共同体のあいだに生まれる」とマルクスを引用するんだが、その「共同体」の原語が「ゲマインウェーゼン」だってとこまでは気がまわらない。そういう好々爺の素朴さが憎めない。苦労して『宇野弘蔵著作集』10 巻を読んで、そう思う。お弟子さんは「二人の宇野さん」て言うけど、ぶっちゃけて言えば矛盾したことを平気で言う。

◇村上　宇野さんには、お弟子さんとの対談が多いですね。しかもお弟子さんも先生に面と向かってかなりきついことを言ったりする。

◆望月　そう。そこがいい。宇野さんは痛いとこ突かれてもニコニコしている。あの人は本当にゲゼルシャフトリッヒな人だね、商家の生まれだからかな。一言で言えば、宇野派はのびやかなゲゼルシャフトで、大塚学派はきびしいゲマインシャフトか。『共同体の基礎理論』なんかにも、「殿、ご乱心」なんて諫言はしないだろ。亞・教義体系か。

◇村上　ところで、『マルクス歴史理論の研究』７章は、博士論文審査報告書（『専修経済学論集』第 10 巻 2 号、1976 年）でも、「７章についてはちょっと位置付けが難しい」みたいなこと

が書かれていました。

◆望月　内田義彦さんにもやっぱり「第 7 章を書くために第 6 章までを延々と書いた」という僕の真意は伝わらなかったようだ。まあしかし、内田さんが僕の体系を全部理解しなくちゃならない義理はないよ。それでいいんじゃないか。

◇村上　けれど先生、内田理論というか内田思想というか、ちょっと漠とした言い方ですが、そのエッセンスを継承されているのは先生だと思います。

◆望月　褒めすぎだ。お追従のように聞こえる。でもちょっとは嬉しいね。今や内田さんよりずっと年上になっちゃったけど、内田さんの文章を読むと学生みたいな気分になる。

◇村上　で、話を『マルクス歴史理論の研究』以後に移したいのですが、その前に、例の「唯物史観の公式」のところに出てくる「プログレッシブ」というタームの解釈、あれについて一言うかがいたいです。先生独自の大胆な問題提起で。

◆望月　あれは『経済学批判』序言からよりも、「ヴェラ・ザスーリッチへの手紙」を読んでいてヒントをつかんだ。この手紙でははっきりと人類史を地層の歴史になぞらえているからね。その目で、あの序言の「いわゆる唯物史観の公式」の部分を読み直すと、もろ地質学なんだ。

◇村上　で、これまでの「あいつぐ」とか「前進的」とか「継起的」とか、どれも段階を追って発展してくるというイメージの訳語を「全部間違いだ」と。

◆望月　そうなんだ。社会構成の「構成」（フォルマシオン）は地質学のタームで、地層は内部矛盾で発展なんかしない。たんに下から上へ積み重なってるだけだ。これについて、教義体系の雑誌『経済』に面白い論文が載ってたという話をしなかったかね。

◇村上　いえ。

◆望月　その論文の筆者は共産党の元科学部長で、一時、日本の地質学界のカリスマだった人だ。今では常識となっている「プレートテクトニクス」、大地震が起きるとすぐ太平洋プレートとフィリピン・プレートがどうだなんていう図がテレビでも使われるでしょ、あれ。ところが

この地質学界は、世界ではもう常識になってたプレート移動説をむきになって否定してた。それでこの説が日本に受け入れられるのが 10 年も遅れたというんだな。

◇村上　そういえばいつか『プレートテクトニクスの拒絶と受容』という本を見せていただきましたね。でも何でそんなに「拒絶」したんですか。

◆望月　地層も歴史的に発展する、というんだ。よく分からないけど、造山運動というのがキモらしい。元はエンゲルスの『自然弁証法』だろう。プレート説は、弁証法に反するというわけだな。この大ボスさんが『経済』に載せた一文の冒頭で、「最近になって二、三の哲学者からザスーリッチの手紙のフォルマシオンという言葉をどう理解すればいいかという質問を受けたので･･･」と書いていた。明らかに僕の問題提起にショックを受けた連中からの質問だろうが、「二、三の哲学者」には笑ってしまった。

◇村上　といいますと？

◆望月　「二、三の人から」と言えばすむところを、また「マルクス研究者から」と正直に言わないで「哲学者から」なんて書くところがわざとらしい。教義体系の歴史学者かマル経学者にきまってる。当時いろんな地質学の本を読み漁って、地質学界全体としてテクニカル・タームが統一されてないのには呆れた。一つの原語の訳語もばらばら。そこが井尻論文のつけ目で、この語はああも訳すし、こういう訳語もあると知識を並べ立てて、僕の名前も出てたけど、結局望月説は無理筋でやっぱり従来どおり「あいつぐ」でいい、とはさすがに書けず尻切れトンボになっている。

◇村上　「哲学者」先生たちも腰砕けというところですか。

◆望月　ずいぶん多くの書評をいただいたけれど、たいていは前半の疎外論やド・イデ論で終わっているから、おしまいの方を読んでくれたと思えば腹も立たない。

◇村上　それと、いわゆる発展段階のうちの一段階としての奴隷制を否定されたところにもショックを受けた人が多かったんじゃないですか。「奴隷革命説」の信者なんか。。

◆望月　マルクスの言葉を、梅棹さんのあの『知的生産の技術』に出てくる京大型カードにせっ

せと収録したけど、「奴隷制もしくは農奴制」という特異な一括語がひんぱんに出てくるのが、ずっと気になっていたんだ。その気分の悪さ、というか澱（おり）見たいなものが、前に話したウェーバーのグルントヘルシャフト論を読んでて、スッと溶けた。ピカッとひらめいたと言ってもいい。「なんだ、マルクスとウェーバー、同じことを言ってるんだ」とね。その集約的な表明が、例の「ワラキアのボヤール」だ。

◇村上　いきなりそう言われても…。

◆望月　ワラキアというのは今のルーマニアの南半部を占めた公国だ。あのドラキュラ公爵の国だと言えば、いくらか親近感が湧くだろう。北半分のモルダビア公国とまとめて、マルクスは「ドナウ諸公国」と書いてる。「ボヤール」というのは大領主。で、そのドナウ諸公国では「農奴制から賦役が発生したのではなくて、賦役から農奴制が発生した」とマルクスが書いている。

◇村上　なんだか、無理に順序立てているような気もしますが。

◆望月　無理どころか。つまり農奴制という身分秩序をまず制定して、その農奴たちに、この制度のきまりとして賦役または地代を収めろ、というんじゃない。順序が逆だ。ひなびた共同体に集って平和に暮らしていた農民たちの村に、歴史の転変のなかでやってきた軍事的征服者が、村びとを集めて、「これからは俺が主人だ、俺のところへ貢ぎ物を持ってこい、いきなり言われても手持ちが無いやつは俺の畠に来て働け」と、こう命令するわけだ。で、「へい」となって、それがしばらく続いているうち「こいつらを上手く統治するにはどうしたら良いか」と思案した末、「これからお前らを農奴と呼ぶ。農奴は週に 2 日領主の土地を耕す。月に 1 度ローソク 10 本、死んだら死亡税、結婚するなら初夜税を納める」とか、こういうのを決めて行くわけね。

◇村上　私、院生の頃、先生の学部の講義「西洋経済史」を 1 年を通じて聴講させていただいたことがあるんです。その中で、池のカエルがうるさいから一晩中、領主のために水面を棒でたたいてカエルを黙らせる「賦役」とか、種々様々な「税」について説明されていました。結婚税もその一つでしたが、「初夜権」から来てるんですね。確か「フィガロの結婚」にも出てくる…

◆望月　それだ。つまり農奴制が先にあって、農奴が生まれたんじゃない。先に賦役やら何やらがあって、そこから農奴制が生まれたんだ。で、これね、そっくりウェーバーですよ、「征服

した被征服民を労働力として使役するか、地代源として利用するかは、まったく場合による」とね。スターリンは「奴隷は殺せるが、農奴は殺さない」なんて区別するが、奴隷は労働力なんだから、その財産を自ら抹殺する主人がどこにいる。

マルクスが「ワラキアのボヤール」を念頭において「奴隷制もしくは農奴制」とひとくくりで捉えたのは、「領主支配」、言い換えて「グルント（土地）」の「ヘルシャフト」（支配）にとっては、征服した農民を奴隷として使うか、農奴として貢納を召し上げるかは、どっちでもいいんだ、と言いたかったわけだ。この前近代史認識を知るためのカギの中のカギなのに、マルクス主義史家をもって任ずる連中がここを問題としてるのを見たことがない。なぜなら、「原始共同体→奴隷制→農奴制（＝封建制）→資本主義」という教義体系の根幹図式が、土台から崩れるからだね。

◇村上　あの図式は、いっぺん頭に入っちゃうと、もう抜けませんね。

『ゴータ綱領批判』の翻訳と解説

◇村上　そろそろご研究の第三局面の「第三世界論」にまつわるお仕事の話を伺わせていただきたいのですが、その前に、岩波文庫『ゴータ綱領批判』（1975 年）のご翻訳がありますね。『マルクス歴史理論の研究』を出されて 2 年後ですから、すぐですね。また 1976 年 3 月には『思想』に「『ゴータ綱領批判』の思想的座標」を掲載されています。このあたり、ひとこと。

◆望月　「ひとこと」で済めばいいが。文庫とはいえ、あれには編制と翻訳に 2 年まるまるかかった。75 年がちょうど『ゴータ綱領』の 100 周年だから、それに間に合わせようと頑張った。

◇村上　どんなご苦労、あるいは工夫をされたんですか。

◆望月　岩波から話があったとき、どんなつもりで引き受けたか、ちょっと話しておきたい。これは今まで誰にも話していないからね。

ドイツの労働運動史なんて素人もいいところだから断るのは簡単だったんだが、二つのことを考えた。『ゴータ綱領批判』の中で、マルクスは「プロレタリアートの独裁」というだろう。久しぶりだなと調べたら、彼にとって 20 年ぶりなんだ。言ったのは間違いないんだから、変な訳者の変な解説で、「マルクスは終生プロ独を、（廣松さん流に言うと）“宣揚”した」と書かれかねない。だけど、論脈から言ってそんな必然的なもんじゃないんだ。ここはひとつ引き受け

て、おかしなプロ独バネを抑止しとこう、こう思ったのが一つ。

もう一つは、労働貨幣論。未来社会の流通手段として労働時間手形みたいな、今から見たら「アホな」と思われる主張が出てくる。これも変な訳者の解説で、「マルクスの未来社会像は地域通貨社会だ」などとはやされると、それでマルクス入門をする人たちに呆れられてしまう。で、これも慎重な解説で、あらかじめトーンダウンさせてしまおう、と。

◇村上　労働貨幣論というのは 1830 年代のロバート・オーウェンや 1850 年代ころのプルードンなどを先に思い浮かべます。地域通貨は近ごろ注目されていますが、現代の地域振興には有効でしょうが、将来社会の中核的制度としてはやはり空想的ですね。マルクスは晩年になって、なんでこういうことを言い出したんですかね。

◆望月　さあ、それはエンゲルスを含めて誰にも謎だろう。それからもう一つあった。『ゴータ綱領批判』というと、誰でもあの「各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて！」という、有名な対句を思い出す。ずーっと若いときに、あるマルクス主義入門書で、この言葉を紹介したくだりに「何という簡潔で天才的な呼びかけだろう」というような褒め言葉があって、訳も分からず感動した思い出がある。

『ド・イデ』と取り組んでたころ、ひとがあまり読もうとしない「聖マックス」の章を読み苦しんだことがある。その中にもうこれが出ていた。サン・シモン派は「各人にはその能力に応じて、各能力にはその仕事に応じて」という。そればかりじゃない。『ド・イデ』の第 2 巻で執筆してるモーゼス・ヘスが、共産主義とは「各人にはその必要に応じて」だ、と書いてた。だから僕は、例の対句が必ずしもマルクスの独創的な言い回しじゃない、と思っていたが、調べると他にもわんさかとある対句で、マルクスのはそのワン・オブ・ゼムだったという注を書きたかったんだ。

◇村上　サン・シモン派やモーゼス・ヘスの、あのフレーズは坂本慶一さんや良知力さんなどによって、個別に紹介はされていますが、先生のあの「注」は、ビュシェ派、カベー、ルイ・ブランの同様なフレーズをこれでもかというように紹介されていましたね。

◆望月　また、文庫としてどう編集するか、という問題がある。『ゴータ綱領批判』というタイトルは誤解を招きやすい。ゴータという町で開いた、当時の２派の合同党大会で採択されたのが、正式なゴータ綱領だが、マルクスが批判したのは、その大会の前に、マルクスに親近的なアイゼナハ派というグループが作った草案なんだ。多分に妥協を意識して作られている。とい

うわけで、最低でも草案と、採択された正規の綱領を並べて見せなくちゃ、「批判」の意味がわからない。ところが成文の訳がないんだ。そうなると、その成文を採択したときに合同した二つの党派の、それまでのそれぞれの綱領との比較が必要になるよね。両派がこの合同でそれぞれが何を捨てて何を得たか。実際、マルクスの批判にまつわるエンゲルスやブラッケの手紙も、それらの合同前の内輪話が出てくるんで、やっぱり、いろんな綱領を並べて見たい･･･、とこうなる。

◇村上　お話を伺うとまったく当然のことのように思えるのですが、今までそういう訳書がなかったのが不思議なくらいですね。

◆望月　そうなんだ。で、100 周年に間に合わせるために、『マル歴』のことは一切忘れて資料集めと解読に熱中した。ゴータはもちろん、ハレやエルフルトで開かれた党大会の議事録にまで目を通した解説はこれが初めてだろう。大会でのやりとりが面白いね。「ドイツ社会主義労働者党」の「ドイツ」が、草案では形容詞の「ドイッチュ」になっていた。カウツキーが、出生の偶然でドイツに暮らす労働者もいるんだからと、頭の「ドイツ」を最後に持ってきて「ドイッチュランツ」にしようと提案したところなんて泣かせる。

◇村上　ああ、そうなんですか。ドイッチュランツだから、ドイッチュラントの所有格。ドイッチュもドイッチュランツも日本語にすると「ドイツの」になっちゃって区別がつきにくいですが、原語では微妙に違いますね。それをカウツキーが提案したと。彼はオーストリア（プラハ）生まれでしたね。

◆望月　党はドイツに作るんだから、それが動機じゃなくて、ユダヤ人労働者やポーランド人労働者への配慮さ。「ドイッチュ」だと「ドイツ人の」とも響くからね。ユダヤ人ラサールを党祖といただくラサール派への配慮もあったんだろう。そう言えば、ナチス（ＮＳＤＡＰ）のＤは真ん中にあるから、「国民社会主義ドイツ人労働者党」だな。

◇村上　この文庫の奥付を見ると、昭和 50 年（1975 年）5 月 16 日発行になっており、その 2 年間のご苦労の末、「綱領」採択 1875 年 5 月 25 日にギリギリ間に合ったというわけですね。そういえば僕も東独崩壊 4 年後の 1994 年、在外研究の折にゴータの会議場に行ってみました。大きなホールとかではなくて、普通の建物で、隣が SPD の支部になっており、東独時代ミュージアムになっていた会場は東独仕様の展示の入れ替えの時期で、閉まっていました。背伸びして

窓から中の様子を眺めたものです。エルフルト大会の会議場も行きましたが、こちらも展示入れ替え中でした。西独 SPD 仕様の展示がどうなっているか、もう一度行ってみたいです。

◆望月　ああ、あのホールには僕も行って見た。街の本屋で地図を開いて見たが載ってないので、広場のベンチに坐ってた老人に「100 年前、この街で…」と聴いたら、二つ返事で「ああ、チボリ公園のそばだ」と教えてくれた。あの人は東独で共産党に吸収された社民党の人だったのかな。

◇村上　私はこの文庫末尾の先生の「訳者解説」と『思想』論文を拝読して、国際労働者協会でのラサール派とバクーニン派、それにプルードン派などが入り交じった思想的・運動論的な微妙なバランスの真ん中に当時のマルクスがいた、という先生のご指摘が非常に印象に残っています。

◆望月　バクーニンの「共産主義は学者独裁国家だ」というしつこい宣伝にたまりかねたマルクスが、「俺の独裁じゃない、労働者全体の独裁だ」と火の粉を払ったわけね。

第三世界論・接合理論・原蓄論

◇村上　さて、第三世界論に話を戻します。私は『マルクス歴史理論の研究』のお話を伺っていて、つくづく先生のご研究の第一局面＝中世農奴制研究と、第二局面マルクス歴史認識研究の連続性を再認識しましたが、僕の言う第三局面つまり第三世界論研究も、底流で第一局面・第二局面と有機的につながっているんだなと痛感します。そこらを密かに期待してお話を伺おうと思っているのですが。室井さんがよく「三部作」と言われていた『経済評論』での連作、まず 1981 年 4 月「第三世界を包みこむ世界史像」(『経済評論』、日本評論社)、同年 7 月「生産様式接合の理論」(同)、同年 12 月「第三世界研究と本原的蓄積論」(同)。これ以後も 1982 年 4 月『専修大学社会科学研究所月報』(No.224) に「生産様式の接合について・再考」、さらに 1982 年 5 月『思想』に「本原的蓄積の視野と視軸－『資本論』原蓄章を読む－」と続きますね。あれはどういうきっかけで取り組まれたのか、そこからまず伺いたいのですが。

◆望月　あの頃、第三世界論と言えばグンダー・フランクにまず指を折るのがふつうだ。彼の代表作で世界的に読まれた『低開発の開発』という本を、各国の研究者が論評してて、そのひとり南米のラクラウという人が「フランクの大命題は正しいけど、ラテン・アメリカには資本

主義一本ではいかない大地主制の問題がある」と反論した論文があって、この大地主制を「再版農奴制」と名付けたんだ。シャープだね。ところがこのタームのもとが分からない。というんで「これは望月さんに聞くしかない」ということになって、森田桐郎くんの研究会に呼ばれたんだ。フランクとかラクラウとか何も知らないけど「再版農奴制」なら任せとけと、ほとんど手ぶらで顔を出した。

◇村上　その面々は・・・・・・

◆望月　森田君は当時いくつか研究会を組織していたらしいんだが、この集まりは森田君のほか、東大の国際経済論の助教授、それに院生 2 人という小編成で、その院生の一人が今、専修大副学長だ。こっちは再版うんぬんしか知らないから、他の話はただかしこまって謹聴してたんだけど、メインはフォスター＝カーターという、アフリカのどこかの大学教授だったイギリス人の論文の検討会で、それがひどく面白かった。例の「諸生産様式の接合（アーティキュレーション）」という問題の提唱者。

◇村上　それに魅入られたわけですね。

◆望月　まさしく魅入られた。かつての帝国主義支配も、いまの第三世界のあり方を、中心部（かつての宗主国）と周辺部（かつての植民地）の、それぞれの生産様式が、人間の身体で言うと、肘や膝で連結しているようにつながっている、というつかみ方だ。それで図書館で第三世界問題の論文を載せている外国の雑誌が読み切れないほどあることを知った。意外だったね。いっぱいある。しばらく英語の本を読んでいなくて、最初は骨がボキボキいったが、次第に慣れてきて、こりゃ千年一日、決して悔い改めない教義体系派をやっつけているより、ずっと面白いというふうになった。

◇村上　ウォラシュタインの「世界システム論」との出会いもその過程でということでしょうか。で、1981 年から書き始められますね、『経済評論』の 3 論文。これをざっと 1 年のうちに書かれたんですから、えらいスピードですね。

◆望月　いや、『経済評論』の原稿は一律に 400 字詰 40 枚ぽっきりの注文なんだ。雑誌の編集・体裁からして多くても少なくても困る。もともと構想を文字に書き置いて見るとふくらんできて、100 枚ぐらいにはなってた。それを組み替えたり、文献も読み足したりして、ほぼ 3 分の 1

づつ発表というわけだ。

◇村上　この第一論文の中で、10 年間の「新従属理論」をサーベイされ、例えば従来の開発経済論、開発途上国支援のために何ができるかといった視点から、アメリカのですね「二重構造論」みたいなのが出てくる、それへの真っ向からの批判としてフランクあるいはウォラシュタインと続くプロセスが書かれています。それにしても「低開発の開発」というシェーマ、日本語だとちょっと難しいですね、言い方が。

◆望月　むかしは「後進国」と呼んだが、それじゃ失礼だと言うんで、いんぎん無礼に「低開発国」と呼ぶようになっていた。今じゃ「発展途上国」。しかし、低開発というのは昔からそうなんじゃなくて、資本の世界戦略として「作られた低開発」だったという。開発されれば開発されるほど貧しくなるという把握なんだよね。「開発」は Development だから、「低開発がますます進展する」とレトリックをかましたわけだ。

◇村上　ここで改めてラクラウに注目されておられるのも、彼の主張の中に、一つのゲマインヴェーゼン内での諸生産様式の接合という問題提起があったからとうことじゃなかったでしょうか。

◆望月　その通りだが、ラクラウのは特殊ラテン・アメリカ的で普遍性にちょっと欠けるが、その点で、フォスター＝カーターの方が理論的に面白いのだ。

◇村上　で、『経済評論』第 2 論文が、「諸生産様式接合の理論」。

◆望月　アーティキュレーションには 11 種もの訳語があるって所、面白かっただろう。

◇村上　まあよく渉猟されましたね。ここで複数の生産様式の接合（アーティキュレーション）という問題提起をした張本人のアルチュセールを読まなくちゃとなった。いや、僕は博士課程に 1982 年度までいまして、ですからこの時期の先生のご研究プロセスが大学院のゼミに反映されていて、よく憶えています。「フランス語やれ」と言われながら、アルチュセール『資本論を読む』の原文を丹念に読みました、というか、先生に教えていただいた。その後もなかなかフランス語には立ち入れませんで、後ろめたいのですが、少なくともあの翻訳書がでたらめに近いってことも分かりました。そういうふうにアルチュセールとバリバールに立ち戻って、更に

ラクラウによる独自の接合概念の使われ方を先生の第 2 論文は紹介されている。そして『経済評論』第 3 論文「第三世界研究と本原的蓄積論」、おそらくここで先生のご意見を提起しようというような形になっていると思うんですね。で、アミンの「原蓄」論を「並行原蓄」、「世界資本主義における、中心部による周辺部の暴力的搾取」、「農民の賃労働化」の現代的な日々の進行というところを評価された上で、周辺部内部における諸生産様式、複数の生産様式の間で行われる原蓄」論、こういう現代の構造の意味を問うわけでしたね。メイヤスーの名もありました。

◆望月　「労働力の還流化」というおもしろい問題を提起してた。今は必ずしも還流（里帰りしてまた中心部へ戻る）しないでヨーロッパに居付いちゃうから、いろんな宗教的摩擦や人種差別問題が起きてるね。

◇村上　それはさておきまして、「原蓄」を、資本主義が生起するに当たっての常識的な意味の「原蓄」と、資本主義が生成し、本来的蓄積を行う際に平行して行われる、国内の他の生産様式と接合して、他の生産様式を対象とした「原蓄」、他国の他の生産様式を対象とした「原蓄」、そういうような「原蓄」の方向性というのですか、いろいろあってという形の分析視角を提起された。

◆望月　エジプト人のアミンが、現代における植民地の収奪というのは、要するに中心部が周辺部に手を伸ばしてきた「原蓄」なのだと言ってる。「なるほど」と刺激を受けつつも、待てよ、こりゃ『資本論』がとうの昔に言ってたぞ、と改めて読み直してみたら、何と、というのはおかしいけれども、要するに、彼はごく最近の新聞記事を取り上げて「原蓄」と言っているのに気づいた。つまりマルクスの眼前で「原蓄」が行われていたことに、遅まきながら気が付いたわけです、ほとんどの人は大体あのエンクロージャーのところとその前夜しか読まないんだ。それにあの労働者の陶冶のくだり。だけど、丁寧に読み込んでみると、一番最後になって、つい最近読んだ新聞から取ってきた記事が「原蓄」の一例として挙げられてる。

◇村上　マルクスの前の世紀に行われた「原蓄」ではなくて、マルクスの生きていたその時の。

◆望月　何百年前から続いて、つい目の前でも「原蓄」が続いている。この「原蓄」を、最初のエンクロージャーの「原蓄」とどういうように範疇的に区別するか。中にはインド相手にアヘンの売買で大もうけしたヤツの財産もイギリスにとっての原蓄だ、とさえ言う。素性がどん

なに汚く、むごたらしいものでも、イギリスに持ち帰って銀行に預金すれば、それが総資本の原蓄資金になるって言うんだよ。それをカテゴリー別に分けた上で、あらためて全原蓄過程をどうつかむかということに問題意識が移ってきて、それがあの『思想』論文（「本原的蓄積の視野と視軸」）になった。いきがって「本原的蓄積」なんて表記したので、私本人以外はネットじゃ検索できなくなった。半分残念。

◇村上　感慨深いことは、このご研究の第三局面もまた、第一局面と底流でつながっているということです。この場合「再版農奴制」研究という流れですが。この第三局面では新たに異なる生産様式の「接合」関係に注目されました。この点について、大学院での先生のコメントを思い出します。講座派の日本資本主義の構造認識ですね。半封建的な地主・零細小作制と資本主義大工業との構造的な相互依存関係という。あれも「接合」視点で振り返ると的確な認識だった、そんなことを言われたのを憶えています。

◆望月　ふと言って見ただけだが、そういう視角のもとは、例のフォスター＝カーターなんだが、その彼の発想源は、ピエール＝フィリップ・レイの『階級同盟』という著作だ。フランス名前だから「レー」と表記するのが正しいが、何となくだらけるので「レイ」としておこう。レイは、イギリスの「封建制から資本主義への移行」期にあった経済構造を、「資本主義生産様式と封建的生産様式の『接合』」ととらえたんだが、興味深いことには、その後もずっと、すくなくとも『資本論』の地代論が分析している時代もなお、二つの生産様式の接合が続いている、というからおもしろい。

「接合」のもとの意味は、二つ以上の独立した骨が、両者の間にある軟質の靭帯部分で柔らかくつながっている、という解剖学のイメージだ。手足の肘や膝を考えて見ればわかる。この視点から見ると、マルクスが各所で口を酸っぱくして、「近代的土地所有とは、実は封建的土地所有なのである」と不思議なことを言ってた真意がわかってくる。

資本家、と言ってもさしあたりは農業資本家だが、その彼ははもともと、せっかく稼いだ利益の中から、その一部を「地代」として地主に払わなくちゃならないのが、業腹でしょうがない。「自分では働きもせずにむさぼる不労所得階級じゃないか」というわけだ。そうぶつくさ文句を垂れながら、両者が「階級同盟」を結んでいるのは、生まれは違うが私有財産制度を守り、ともに労働者の搾取から利益を得ている、という「共感」からだろう。

◇村上　それで『マルクス歴史理論の研究』の中でも、「地代とは（言い換えれば地主の土地所有）は封建的土地所有なのだ」、「資本と土地所有とは『複受胎』の児なのだ」という、マルク

スの言葉を繰り返し引用されたわけですね。

◆望月　『剰余価値学説史』、いまの『資本論草稿』だが、その中で、useless superfetation と英語で書いてる。この英語に MEW の編集部が注で、「役立たずの瘤（こぶ Auswuchs）」とドイツ語訳している。だが、この編集部注は間違いなんだ。

◇村上　「こぶ」としたのは誤訳なんですか。

◆望月　そうだ。英語の superfetation は、英和の中辞典クラスにも出てないくらいだが、マルクスの訳者たちはみんな困ったんだろう、「無用の長物」なんて訳してた。上の『学説史』の訳もそうだった。「複受胎」という訳語はまちがいじゃないんだが、この訳語でわかるかい？

わからないだろう。実は僕もそうだった。産科学用語だから、医学専門書店のドアを押して、いかにも医学生みたいな顔をして産科の教科書を開けばわかるのだろうが、やっぱりそのドアは押せないよ。実はネットでわかった。「異種同期受胎」とか「同期重複妊娠」というんだね。イギリスの近代直前という母胎に、若い資本主義とやや老いた封建的土地所有という二人の男が、間をおかずに sperma を注入した結果、父親を異にする双子を妊娠したというわけだ。昔あんなに悩んだのが嘘のようだな。

これではっきりした。資本と土地所有は、血と顔かたちこそ異なれ、近代という母親から生まれた双子のきょうだいだったんだ。愛憎あい半ばして、しかも互いに離れられない。封建的土地所有の血が流れる「近代的土地所有」と、資本がどうしても片方と縁が切れないのか、意味をわかっていながら、マルクスはいらいらしたわけね。

◇村上　「階級同盟」とうかがうと、私などはすぐ、プロイセンのユンカーと、ドイツ西部の大工業資本家が結んでいた「麦と鉄の同盟」を想起します。あるいは戦前日本の半封建的地主と産業・銀行が依存しあってる関係を理解するのにも使えそうですね。それはともかく、当時の先生としては、割り切れない思いをかかえたままでいらっしゃったので、「接合」理論の可能性みたいなものに注目されたのでしょうか。

◆望月　当たらずといえども遠からず。それと同時に、明らかに無用の徒食階級なのに、マルクスが『資本論』３巻の最後を「三大階級」として、資本家と労働者と肩を並べる一大階級として遇してるのは、『マル歴』の段階では、どうにも違和感を拭えなかったけれど、それを押し殺して「絶対地代の発見」にひとつの、いわば旋回機軸を見ることにした。

◇村上　あそこは私も実は敬して素通りしたところで。

◆望月　まったく僕の責任だ。『資本論』の地代論に見える「絶対地代」は、マルクスが自分で胸を張るほど、明々白々のカテゴリーとは必ずしも言えないんだから。

差額地代論はまあまあわかる。だけど、絶対地代は、学生の時から理解に苦しんでいた。当時、専大で経済原論を担当された平瀬巳之吉先生に、はがきで失礼だったけど、一応僕の理解を書いて、ほんとはどうなんでしょうかと質問したことがある。ありがたいことに、平瀬先生ははがきの表の下半分まで使って、「きみの書いた図は間違ってるよ」と、こまごまと説明してくださった。ほら、今でも長谷部訳『資本論』に挟んでとってある。

◇村上　誠実なご返事でしたね。あ、５円だ、当時の葉書は。

◆望月　その後もう一回やりとりの往復があったけれど、やっぱりわからなかった。無理を承知で一口に言っちゃえば、最劣等地の差額地代は、理論的にはリカードがそうしたようにゼロなはずなのに、現実には地主はタダでは土地を貸そうとしない。で、そこに支払われるのが「絶対地代」、つまり根拠なし、問答無用の地代だ、というわけだ。マルクスはそこに、「理屈もないのに払われるのは、地主が本質的に封建的地主だからだ」と結論づけたわけだが、それでよせばいいのに、地代額を根拠づけようとしていろんなことを述べたので、いろんな未決問題を派生しちゃったんだ。そもそもその地代の金額を計算できる根拠があるのか、最劣等地の借地人が払えば、同額の絶対地代が、それ以上の借地にも次々に上乗せされるのか、などなど。

学生の時の僕の疑問は、「どんな場合だって、土地はタダでは貸さないぞ」という地主の一方的宣言みたいなもので、計算の根拠などない、「所有のお化け」みたいな理念じゃないのか、という疑問だった。その後、時は流れて『マル歴』を仕上げる時点で、改めていろんなマルクス地代論の本を読んだんだけど、結論は「絶対地代という概念に、共通の理解はまったくない」ということだった。宇野派の岩田弘さんなんか、あっさりと「最劣等地の差額地代だよ」と片付けた上で、差額地代のごました計算例を「閑人のなぐさみごとだ」と一刀両断だ。すっきりしたなあ。

◇村上　……

◆望月　すっかり退屈しちゃったみたいだな。ここでちょっと整理しよう。

まず第１。「諸生産様式の接合」という概念装置を使えば、「地代」とは、近代という同じ母

親から生まれた異形のきょうだい、封建的地主階級を黙らせるための、資本の不承不承の出費だった、とすっきりまとめられる。もともと理論的に穀物の輸入はなしという前提なんだから、絶対地代額を計算したって徒労なんだ。

つぎ第２に、中心部、つまり資本の本国においてすら、資本と非資本とが接合されているんだから、いわば追加原蓄のほこ先を、本国の外、つまり周辺部に求めて出てゆくのは、ごく自然な成り行きだ、ということ。それは、地元の仲介人を利用した、地元の生産様式と、本国資本主義との接合であって、資源の掠奪、労働力の極端な搾取、本国製品の売り込みなど、さまざまな形を取る。つまり本国でやり慣れた手口だ。

最後。この「接合」という柔軟な連結部を通じて「資本の文明化作用」が浸透する。

◇村上　なるほど。しかし先生。中心部資本主体の「世界原蓄」が進行してゆく過程で、いずれは、そういう外部からの強烈なインパクトを受けて、いわば「第三世界『における』原蓄」も一方で芽生えるじゃないですか。『経済評論』３部作のその次ぎに、そうした問題を論じられるかも知れない、という期待は多かったと思いますけれど。私もそう期待しました。

◆望月　無理いうな。いやだって言うのに押し上げた連中だって、必ずしも学部長に全面協力するわけじゃない。その心労を抱えながら、肌理の細かい論文なんて書けるもんじゃないのだ。

◇村上　そうおっしゃられると一言もありませんが、でもそうおっしゃりながら韓国語をマスターされたりして、いわゆる「第三世界」の枠を抜け出しはじめた韓国経済論なんかおやりになっておられましたね。学部長２期を務められてから、韓国に一月半ですが留学なされた。あのソウル滞在はどういうおつもりでしたか。

◆望月　ちょうど韓国で第三世界論が盛んになっていた。僕を含め世界各国の論文を集めて編集した高麗大学の教授と話したり、東大で森田くんのところに滞在したソウル大の先生から「内田義彦論を聞きたい」と言われて一席ぶったりした。『経評』の第２論文でもちょっと触れたが、「中心部と周辺部の接合」には、「接合深化をおしすすめる仲介人」が重要な役割を果たしている。日本の植民地支配にもそういう要素があったんじゃないか、と図書館を漁ったが、これは成果ゼロだった。まだ軍政下だったしね。とにかく、なつかしい「第三世界」というフレームワークの役割はほとんど終わった、と実感したことはたしかだ。

◇村上　であればこそ、「第三世界」でまずければ「途上国」における、半ばは自発的な原蓄の

あり方がますます重要になりますね。現実に、日本経済も中国市場を抜きにしては成り立たない、というような事態が進みつつありますし。

◆望月　まったく同感だ。途上国「における」原蓄の主体がそれなりの存在感をもって立ち現れつつあるんだね。ウェーバー的に言えば、まだ「パリア資本主義」の塊みたいな主体で、原蓄の進め方だっていかにもブルータルだが、世界的な市民社会度が上がってるから、『資本論』第 24 章みたいな暴虐無残ぶりはもう通用しないだろう。そこに希望がもてる。むかし、「資本の文明化作用」というと、一も二もなく「ヨーロッパ中心史観だ」と罵られたものだが隔世の感がある。とは言うものの、手放しの楽観とはほど遠いよ。いま頭からしつこくはなれないのは、非・某信念・世界でならともかく、その「非」がつかない世界での「文明化作用」の進展はそう一筋縄では進まないだろうという、いささか憂鬱な予感だ。ルターが 95 箇条の大字報を張るまでには 1512 年もの時間がかかった。だから、「非」がつかない世界がそこまで行き着くには、まだあと 250 年以上もあるということだ。ブローデルやアルチュセールが言うように、イデオロギー的審級に流れる時間は、経済的審級の進む時間よりも、ずーっと長いからねえ。とにかく、せっかく 82 歳まで生きたんだから、天命を全うしたい。この話はこれでおしまい。

◇村上　もうだいぶ時間も過ぎてきました。最後のところは、先生の学生時代の「地代論」への疑問が、「接合」理論によって氷解するという、これはかなり象徴的です。つまり、最初に私が整理しました先生のご研究のプロセスが、第一～第三へと局面を大きく変えながら進んできたように一見すると見えるけれども、よく見ると、一貫した問題意識が通底していることが分かります。それは前近代を「奴隷制および農奴制」として捉えられて、これを近代と明確に区分し、この前近代から近代への移行を分業とりわけ「都市と農村の分業」によるものとして理解される。この分業論を軸としてマルクス研究を行われ、さらに前近代と近代の依存関係を「接合」理論によって明らかにされるというものだったと思われます。私も改めて先生の歩んでこられたご研究の全体像を勉強したのは、つい 10 年前です。そのとき先生の初期の問題意識が『マルクス歴史理論の研究』に、明らかに反映されていることに新鮮な思いを持ちました。また今回のインタビューで、『マルクス歴史理論の研究』が、その直前の 1968－69 年『思想』三論文によるものであり、しかも問題意識としては第三論文（ウェーバー都市・封建制論）が最初だということを初めて伺い、新鮮な興奮を持ちました。先生のこうしたご研究の足跡に貫通する一つの太い「思想」を多少なりとも伺うことができ、大変うれしく思います。では、一応ここで区切らせていただきます。本当にありがとうございました。

以上